

〔翻 訳〕

『閑 中 録』(三)

作 恵慶宮洪氏
翻訳 梅山秀幸

戊寅の年(1758)の初め、英廟はお加減が悪くていらっしゃったが、小朝はあいかわらずご病気で、お見舞いもなさらなかった。ぼんやりとお過ごしになるだけで、そのご様子が月ごとに、日ごとに重くなりまさってゆき、会って拝見するたびに、こちらも正気を失いそうであったが、そのありさまをどう形容すればいいだろうか。正月に月城尉¹⁾の喪が生じ、和順翁主には血統を伝える子どもがいなかったが、まっ正直なお心に大義をしっかりとお考えになって、十七日のあいだというもの穀を絶ち、喪にお服しになった。王家においてこれほど立派なことはなかったが、英廟は、老父をさしおいて、ご自身のことばを聞かずにお亡くなりになったのを不孝だとお怒りになって、旌門²⁾を請われたのを、お許しにならなかった。小朝にはその妹御の節烈に嘆服して、くりかえしほめたたえていらっしゃったが、ご病気の中にあっても、どうしてそのようなことをお忘れにならなかったのだろう。

丁丑の年(1757)の十一月の出来事³⁾の後、観熙閣にとどまっていたが、戊寅の年(1758)の二月、大朝はまたなにごとかがご不満だったようで、小朝のいらっしゃるところにやって来られた。小朝のなさっていることが、どうしても目に障らずにはいない。崇文堂におわたりになって、小朝をお呼びになったが、去年の十一月の出来事の後、初めてお会いになるのだった。いろいろなお振る舞いについてお叱りになったが、特に人をお殺しになったことを、大朝はお聞きになって、ほんとうにそんなことをなされたのかどうか知りたいとお考えになって、真実をいうようにお命じになった。小朝は、大朝が少しでもそのことをご存じになったなら、一大事になるとご理解なさってはいても、御前に出ると、自身のなさったことをまっ正直にお話しになるというふうであった。隠し事をなさない天性でもって、お話しになったのだが、はなはだ面妖なことではあった。その日、小朝が応答

なさって、

「心火が起これば、居ても立ってもいられなくなり、人を殺したり、鶏や獣を殺したりすれば、やっと気持ちが落ち着くのです」

とおっしゃった。大朝が、

「どうして、そんなふうなのだ」

とお尋ねになると、

「心に傷があって、そうなのです」

とお答えになる。

「どうして、心に傷を受けたのか」

というお尋ねには、小朝は、

「愛されていないので、悲しく、お叱りになるので、恐ろしく、そのことが鬱火となっているのです」

とおっしゃって、ご自分がお殺しになった人数をひとりも欠かすことなく、細々とみなお告げになった。大朝におかれても、そのとき、たとえ一時であっても、天倫の情が通じたのか、お心に憐れみのお気持ちが生じ、

「おまえも、今からは、そのようなことをしてはならない」

とおっしゃって、お怒りがすこしおさまったようであった。景春殿にいらっしゃって、わたくしどもには、

「世子があのようなになったのも、当然であったかもしれない」

とおっしゃったが、父と子のあいだで、そうしたおことばが出たのは初めてであった。あまり予期せぬおことばであったから、わたくしは耳を疑いながらも、それを聞いて狂喜し、感極まって、涙を流しながら、

「そのとおりではございませんか。幼い時分からかわいがっていただけず、一度怒られれば、二度怒られて、それで、お心の病にかかれて、ああおなりになったのです」

と申し上げた。すると、

「心が傷ついてあなまったというのかね」

とおっしゃったから、

「傷ついたと申すのでしょうか。恩愛を十分にお受けになっていれば、ああはおなりにならなかったでございましょう」

と申し上げて、悲しくて、泣くと、大朝はやさしいお顔で、

「それなら、わしがあのようにしてしまったわけだ。これからどうして安らかに眠り、どうしておいしく食事をすることができようか。さてさて、わしが事実をうやむやにして葬ってしまうことにしよう」

とおっしゃった。それが戊寅の年(1758)の二月二十七日のことであった。

わたくしは、大朝が観熙閣におわりになる様子を拝見して、またどんな一大事が起こるか、気が気でなく、動転していたところ、予期せぬおことばをうかがったものだから、感激のあまり、

「それはどんなにかありがたいこととございましょう。そのように、お気づかいいただければ」

と申し上げて、お辞儀をして、揉み手をして手を合わせて感謝した。わたくしの挙動をけなげに思われたのか、大朝はきびしい表情を崩されて、

「では、そのようにしよう」

とおっしゃって、出て行かれた。大朝はこれからどのようになさるおつもりなのか、見通しのはっきりしない夢のようでもあった。小朝がわたくしをお呼びになったので、行って、お顔を拝して、

「どうして、お尋ねにもならない、人殺しの話しなどをなさったのですか。すすんでそのような話しをなさって、挙句の果てには、人のせいになさった。どうして心配せずにいられますか」

と申し上げると、

「ご存じのくせに、お尋ねなので、みなお話するほかなかったのだ」

とお答えになった。

「どのようになさるおつもりですか」

とお尋ねすると、

「そのようにがみがみいわないでほしい」

とおっしゃるので、

「このようなことをお聞きになったからには、今後はお父さまとのあいだも幸多く、きつとうまくお運びにおなりでしょう」

と申し上げた。すると、小朝は突然かんしゃくを起こして、

「あなたは父上が特にかわいがっている嫁だが、父上のことばをほんとうに信じているのか。気休めにはなるけれども、とても信じられない話だ。いずれにしろ、わたしが死んでしまえばいいのだ」

とおっしゃった。

そのようなときには、ご病気の人のようではなく、さきほど大朝が悠然たる天倫によってお許しになったことを、なかなか信じられないご様子であったが、いっしょに、そのお話しをしながら、感激して、泣いたものであった。小朝は病患の中であっても、くりかえしそのお話しをなさって、先行きに対して明るい見通しをおもちになった。これがどうして涙を流さずにいられたろう。しかし、天が父子おふたりのあいだをそのままに引き裂いて置こうとしたものか、お父さまが気を取り直そうとなさっても、だれがさせるというのでもなく、ふたたび憎悪が生じてしまうのだった。お子さまの方は、お会いするときには、いつわることなく、ご自分の過失をありのままに告白なさったのだが、これは天質の善良なるところといってよく、普通ならば、どうしてこんなにこじれることがあったろう。天はどうして朝鮮国に万古にない悲しみを見せて、哀痛させるのであろう。

そのおり、小朝には衣帯病が激しくおなりであったが、それはいったいどういう病であったか。これはまた、形容のしようもない奇怪な病であって、たいがい、お着物の一つでも召そうとなさると、十着でも、あるいは二、三十着でもそろえさせなくては気がすまず、鬼神かなんぞがとり憑いたかのように、気に入らなければ、火にくべたりもして、一着ずつ順にお召し替えになるのだった。そうして、ちゃんとお召しになれば、幸いなことで、お側に仕える者がすこしでもまちがえると、衣服をおびることなく、ご自身もぐったり疲れ、周りの者みなぐたびれ果てる、他にくらべるものどてない、困り果てたご病気であった。あるときにはあまりに度を越したお振る舞いもあった。木綿など東宮のお蔵には多くあったが、その疋物を渡してもらいもせず、仕立てることもできなかつたのに、それが怠慢で気に入らないといって、あつというまもなく、人をお殺しになった。あまりに衣服のことにこだわって、お心を砕かれたが、わが家のお父さまはこのことをお聞きになって、心配して嘆息なさることがかぎりなかつた。お父さまはわたくしの心労と殺害される人のことを哀れにお思いになって、そのお召し物の材料の布を引き続き送ってくださった。そのご病気が六、七年のあいだ続き、特に盛んなときもあるかと思うと、やや鎮静するときもあった。そうして衣服を着ることができず、苦勞をなさったが、すこしでも症状が起こったときに、天幸によって一着でもお召しになることができれば、ご自身も幸せなことに思われて、今度はその気に入ったお着物をすっかり汚くなるまでお召しになった。これはいったいどのようなご病気というの

だろうか、千百の病の中にも、服を着るのを嫌う病というのは昔から聞いたこともなく、どうして至尊の東宮がこのようなご病氣になられたのか、天を呼んだところ、わかりようもない。

貞聖王后と仁元王后お二方の小祥⁴⁾を順に行って、二月ほどのあいだ、めざましい事故とてなく過ぎて行つた。国恤⁵⁾の後、小朝はそれまで弘陵に参拝なさっていないので、やむをえず、今回、随駕をおさせなされた。その年、梅雨がながびき、陵行の日には大雨が降りしきつた。大朝は、天気がこのように悪いのは、小朝を連れて来たせいだとして、陵に着く前に、

「おまえは帰れ」

とおっしゃって、ご自分だけがお行きになった。小朝は陵に参拝しようとして、それを止められなさつたが、これは百官軍民の見るところで、いかにも奇怪なことであった。わたくしは陵行からご無事にお帰りになることを祈っていたが、小朝の消息をうかがって、宣禧宮のお側にいて、まったく呆然としてしまい、小朝がお帰りになったら、どんなにかんしゃくを起こされるかと気が気ではなく、その大雨に遭われて引返されたお気持ちを推測するのであった。はたして、激しいかんしゃくが起こって、まっすぐにはお帰りではなく、ソウルの軍営に立ち寄って、気分がくさくさするのを鎮めてから、帰って来られたが、そのご様子は暗く、陰鬱であったことはいかばかりであつたらうか。そのような小朝のご様子を拝見すると、大雨は病のせいなどではなく、また大舜の孝行でもつても仕方のないことなので、悲しまずにはいられなかつた。宣禧宮とわたくしはたがいに向き合い、抱き合つて、ただ泣くばかりのことであつたが、ご自身も、

「しだいしだいに、生きることがいやになってしまった」

とおっしゃって、その後、衣服を誤まって着て、そのことが人の眼にどう映るか心配して、衣帯症が募って行つて、お気の毒でならなかつた。

その年の十二月から大朝のお加減が悪く、乙卯の年(1759)の元旦の魂殿のお祭りにはお出ましにならなかつた。小朝は、お見舞いしようとして、またそのお見舞いのことで気が塞いで、あるいはお見舞いしたところで、大朝にはお喜びにはなるまいと考えると、小朝は憂鬱もはなはだしく、極度に恐れかしまつておられるご様子であつたが、それなのに、どうしてお見舞いなどなさつたのだろうか。大朝をお見舞いなさっているあいだというもの、わたくしは恐ろしく、不安でならなかつた。そのときの領相は金尚魯で、小朝はその者にねんごろにお頼みになつたが、尚

魯という人物は、小朝が志を得られないでいらっしやるのに同情するふりをして、ありがたがられるように、ことばたくみに仕向けたので、丁丑の年(1757)の十一月の出来事からは恩人のお思いであった。大朝のご容態はかんばしくなく、国事をどうするかご心配であるというお話しを大臣たちにはしばしばなさったが、そのとき、臣下たちにとっては事態にどう対応するかまことにむずかしかった。大朝と小朝のあいだでおことばを交されることすらきわめてまれで、尚魯は小朝には成り行きにまかせるようにといい、大朝には聖意のとおりに遵守するとして、泣いて悲しむ様子を見せていた。ただ、尚魯が大朝になにか申し上げようとしても、寢殿には宣禧宮が昼夜を分かたずお側に待っていらっしやり、また近侍する内人たちがいるために、お話し申し上げることができなかった。そこで、大朝が恭黙閣で居廬⁶⁾なさっているときには、房が二間きりで、内房の扉の下にやすんでいらっしやったが、表の房のひと間には三人の提調と医官がつめていたので、大臣は大朝が頭を置かれたところのすぐそばにいて、密々細話をしようとしたものの、中に人々が集まっていたためにできなかった。それでいつも、房の床になにか指で書いてご覧に入れるのだが、なにもお伝えすることはできなかった。大朝は敷居をたたいて嘆息なさるばかり、尚魯は平伏したまま歯噛みをした。そのとき、尚魯は最上級の大臣でありながら、なぜか慟哭もしないで、陰険にも二つの殿宮を往き来して、くちばしをさしいれたが、どうしてそんな振る舞いをしたのだろうか。宣禧宮はいつもその場にいらっしやったが、尚魯がなにか文字を書いてご覧に入れようとしているのを見ては、痛憤して、いまましいことだと考えていらっしやった。

そのころのこと、清衍の疫疾は当初は軽くはなかったものの、後には順調に回復して、大朝のお加減も一年後にはすっかりよくなって、清衍をご覧になろうとみずからおわたりになったことがあった。まことにそれは慶事であったといつてよい。

乙卯の年(1759)の三月に世孫の冊封のことをお決めになって、孝昭殿⁷⁾と徽寧殿⁸⁾にご報告なさった。小朝はその病患の中にあっても、世孫の冊封の礼が行われたことを奇特なこととお喜びになって、病症がはなはだしいときには、妻子をお見分けになることもできないほどであったが、世孫をかawaiiがられる様はくらべるものどてなく、妹たちであっても、群主たちがあえてまぎれて近づいたり、庶出たちがなれなれしく接したりしないように、名分をきびしくなさった。そうしたときには、どうしてご病気のようにいらっしやったろうか。両聖母の三年の喪を終えて、五月六日には仁元大後の祔大廟⁹⁾まで行われたが、そのもの寂しい気持ちをどう形

容することができよう。祔大廟のおりに、礼曹において嬪を選ぶことを請われたが、孝昭殿にお告げになって、嬪をお決めになり、六月には婚姻の礼が執り行われた。そのとき、小朝のご病気はいよいよ重く、みな口に出しこそしないものの、おおいに気掛かりなことであった。宣禧宮はわたくしに、

「貞聖王后がいらっしゃらなくなった上は、この嘉礼を執り行って、すぐに王妃の位を定めるのが当然でしょう」

とおっしゃって、英廟にもお祝いを申され、嘉礼のお支度もみずからなさって、決してまごころをお尽くしにならないということはなく、大朝のために尽くされた德行はご立派であった。嘉礼の翌日、小朝とわたくしが中宮¹⁰⁾のところ朝見に参ったとき、大朝と新しいお后がいっしょに応接なさったが、小朝は行礼を至極丁寧になさった。あるいは礼節が遜順でなくはないかとお心配になっていたようだが、ご本性として誠孝でいらっしゃったことが、こうしたところからもわかっていうものであった。

閏六月に世孫は冊封の礼を明政殿において行われたが、そのとき八歳であった。そのご様子は厳かで、岐嶷となさっていたが、そのお年で、どうしてそのようであったのだろうか。外側から拝見すると、小朝ご自身は政治をあずかる儲の君であり、またご子息が八歳となって、世孫の冊封の礼まで行われたのだから、国勢は泰山のように盤石で、いったいなにを心配することがあったろう。しかし、宮廷の様子は朝夕にますます安寧でなくなって、天を仰いでその行く末をうかがい知ろうにも術がなかった。秋と冬のあいだは、嘉礼の後のことでもあって、王さまのお心もおのずと閑暇ではなく、おわたりになることも少なかったから、なんとかその年をやり過ごして、庚辰の年(1760)になったが、その年にご病気がいっそう重くなって行った。大朝がお叱りになることも日々にはなはだしくなり、小朝のかんしゃくも激しくなって、例の衣帯病も極端なほどになっていった。突然、知らない人間が拝謁しようとやって来たときには、人をやってしばらく足止めをして、出て行かれるとき、あるいはどうしても気に入らないとなると、その衣帯を着ずに脱いでおしまいになり、緋緞の軍服一着を着ることになれば、軍服何着かを作って、無数に火にくべ、やっとのことで、そのうちの一着をお召しになった。己卯の年(1759)と庚辰の年(1760)のあいだ、軍服を作らなかった緋緞はなん匹も残らなかった。すこしでもお気に召すようなすばらしい緋緞がないかと、そのとき、わたくしはどんなに心を砕いたことであったろう。

異常なことが、正月二十一日のお誕生日に起こった。その日はふだんのように過ごされて、ご気分もよさそうであったが、是非、その日は次対¹¹⁾を行おうと、春坊官をお呼びになって、東宮のことをお話しになったが、そのことで大きな悲しみが生じることとなった。いよいよ悲しく、気の毒なことが重なって行って、どの年に誕生日を普通にお過ごしになったことがあったろうか。その日、ひもじい思いをなさって、宮中は恐れおのきながら過ごしたが、運命がどうしてそのようで、ひたすらに悲しい目にお遭いなのであろうか。庚辰の年（1760）の誕生日には、ともあれ、どんなことがあったというのか、かんしゃくがおおいに起こって、その日からは、父母を敬うことばもなく、下品なことばで天地を分かつた、いきどおり、また悲しんで、

「生きていても、なんだというのだ」

とおっしゃって、宣禮宮に対しても不敬のことばの数々を投げかけられた。世孫をはじめとしてその妹たちもお見舞いしたが、高声を上げて、

「父母を知らないわたしが子どものことなど知ったことか。消えうせろ」

とおっしゃった。九歳、七歳、五歳の子どもたちが、お父さまのお誕生日だということで、正装をして、冠帯を帯びて、拝礼したのであったが、その恐ろしい怒り声を聞いて、おおいにおどろき、怖じ気づいたことは、いかばかりであったろうか。

病患がいよいよ募って行って、これまではわたくしに辛く当たられることがあっても、お母さまに対してはそのようなことはなかったのに、その日のころから、もはやお母さまに対しても、ご病気をお隠しになることもなくなった。前日までは、宣禮宮はご病気の話をお聞きになったとしても、あるいはなにかのまちがいではないかとお疑いになっていたが、初めてみずからご覧になって、驚愕のあまり、おことばもなかった。小朝は七十歳におなりの慈母をご覧になってもわからず、かわいがった子どもたちのことも忘れていらっしゃるご様子であったから、宣禮宮と子どもたちの心はおどろきのあまり凍り付いたようであった。そうした光景がいったいどこにありえよう。わたくしは、そのとき、切りさいなまれるような気持ちで、悲しくて、死んでしまいたいほどであったが、生きながらえるしかなく、その錯乱ぶりはどうてい人心地といえたものではなかった。その年の春は、小朝のご病気が日に日に重くなって行き、昼夜となく心配していたが、夏は日照りになったので、大朝はまたお心を曇らせて、

「小朝が徳を磨かないせいだ」

とおっしゃった。いささか聞くに忍びないおことばが数多くあったが、やむをえないご病気でこのようなことになって、耐えがたい心配は無窮にあったから、一時であれ、生きることなく、昼夜となく、そのまま死ぬことだけを考えたことであった。

鄭氏の妻¹²⁾は、後には世孫に対してけしからぬ振る舞いをしたが、小朝のことについてはみずから身体を賭して、小朝に対してすこしでも大朝のお心が和らぐようにお諫めしないのは罪がましいことだと考えていたが、今はそのお兄さまをこわがって、どんなことであっても、

「わたしにはなにもできません」

と、いって、なにもなさらなくなった。庚辰の年(1760)になって、ご病気がいよいよ進んで後、初めは財物も持ち出して、好意を示そうとなさったし、その前には静かにおとなしくして、落ち着いてお話しもなさったのだったが、かんしゃくが激しくなると、悲しみもいよいよはなはだしくなり、ついに怒りが爆発してしまったのだ。妹は父親から慈愛を多く蒙っているのに、自分はどうしてこのように辛い目に遭うのであろうと、妹にも責任があるようにお思いになって、こらえていらしたものがはじけて、

「みんな、みんな、いい加減にしろ」

とお呼びになった。鄭氏の妻は恐ろしくも感じ、また憐れにも思いながら、身の危険をかうじて脱して、無事であった。その鄭氏の妻の話しが大朝にそのまま伝わったならば、事がどのように転ぶかわからないので、いささかの事故もなく、無事にすむように、いろいろと知恵を廻らせた。引見をなされば、小朝のお話しが出るために、引見をなさらないように仕向けて、鄭氏の妻がまた出て行くと、そこでまたどんなことが起こらないでもない心配して、

「二度と、顔を見たくない」

とおっしゃって、またなにごとかが起こるのを恐れて、しばらくのあいだ、その家に出て行かれないようになさった。日城尉の養子の厚謙の冠礼を六月の初旬に行うことになっていたが、お行きになることもできなかった。ご自身のご病気とご自身の身の上がしだいに困難な状況になって来て、その一方で、また一つの宮廷の中でじっとお過ごしになることもできなかった。突然、大朝が御所をお移しになったので、ご自身はただひとり残されて、後苑に出て刀を執って、うさばらしでもしようとなさったが、不意に思いついて、七月初めのころ、鄭氏の妻に、

「どうしても一つ宮殿の中だけにじっとして生きて行くことはできない。上の宮殿を見たいものだ。なんとか手段をこうじて、行きたいのだが」
と、お頼みになった。そんなことをなさろうというときには、わたくしや鄭氏の妻に、

「うまくはからってくれ」

とおっしゃったが、こちらの心配はいかばかりであったことか。そのときわたくしが経験したことは、死と生が紙一重のあいだにあったといえよう。翁主はといえば、どのようにお考えになったことか、ご自身もお移りになることにして、八日をその日とお決めになったので、六日に翁主を呼んで、刀に手をかけて、

「これから、わたしになにかあれば、まずこの刀でおまえをあやめるぞ」

と、脅しになった。宣禮宮も、翁主がどうなることかご心配になって、やって来られ、その光景を目になさったが、そのお気持ちはいかばかりであったろう。翁主は泣いて、

「以後は気をつけますので、命だけは助けてください」

と、お頼みになったが、小朝はさらに翁主をさいなんで、

「この宮廷にだけいては、気持ちがぐさくさして、滅入ってしまう。わたしが温陽に行けるようにしてほしい。わたしが湿気で足が弱っていることは、おまえも知っていることだ。行けるようにしろ」

とおっしゃったので、

「そういたしましょう」

と申し上げて、やっとのことで引き下がられた。大朝が慶熙宮へお移りになって、小朝に温陽へ行かれるよう命令が下ったというのも、こうして翁主が大朝に懇切にお願いなさったという曲折があつて、なんとかすんなりと通つたのだつた。そうでなければ、どうして突然に宮廷を移られて、東宮が温陽にお出かけになるといったことができたろう。なるほど奇妙なことである。こうした手段をはやくからとつて、父子おふたりのあいだを、身をなげうって努めれば、修復できたであろうか。しかし、すべて天がそう仕向けたことであつて、どうすることができたろう。わたくしは小朝とともに旅に出て行こうとせず、立っていたところ、碁盤を投げつけられて、左の目を傷つけ、危うく瞳が光りを失うところであつたが、さいわいにそれを免れ、おどろいて見ると、傷口はたいそう大きかつた。旅にお出かけになるときには、お別れのことばもなかつた。宣禮宮に顔を向けて拝することもできず、愕然

たる思いを抱いて、どうして生きて行くことができたろう。死のうとしたところで、世孫を見捨てることができず、決断することができない。さまざまに困難なことがあったが、それをどうしてみな書き記すことができようか。

旅にお出かけになることになって、温陽への道中の警固を固め、七月十三日にお発ちになったが、宣禧宮は慈母の情として、温陽からどうか無事にお帰りになるようお願いとお気持ちと、ご心配なされる情理は形容することもできないほどで、お食事を続けて作って、送って差し上げなされた。そのとき、姪子の李仁剛が公州營将であったから、どう過ごされているかご様子を存じていようから、しきりに消息を知りたいと思われたようだが、どうしてそうでないわけがあったろう。小朝は温陽にお出かけになるとき、どのようなお考えからか、大朝にお暇乞いをして、お出かけになろうとなされた。そのご旅行の威儀は肅々として、統制がとれており、ご自身の前には前駆けをたくさん立てて、巡礼守が声を晴れやかに挙げ、軍樂をいかめしく奏でて、お出かけになった。大朝はやむをえずお送りなされたが、どうしてそのようにご準備くださったのだろうか。そのときの臣下のだれが、おふたりのあいだのことで口をさしはさむことができたろう。小朝のことがわが身にとってあまりにも重く、あまりにも恐ろしくて、わたくしの命も不知不覚のうちに、いつの日に終るかかわからない状態でもあったから、心の中ではいっしょにいないことを願うようになって、温陽にお出かけになっているあいだだけでも、幸福に感じたことであった。

お父さまが心配なさり、おふたりのあいだでむずかしい立場で過ごされたことを、筆でどう記録することができようか。昼となく夜となく、父と娘は肝腸を焼いて過ごしたが、こうした情景は後世の人たちが想像したところで、わかろうはずもない。温陽にお出かけになったときに、世孫が、

「季の舅¹³と守榮¹⁴を呼んでほしい」

とおっしゃった。わたくしは生命が朝夕の間といった状態であったから、親戚の者も心配をして、甥と弟の妻などがやって来た。

東宮が温陽にお出かけになろうとなされたときは、人がみな息絶えたかのように見えたが、城門を出ようとするときには、激しいかんしゃくが起り、一路の邪魔物もないようにして、通る路に恩と威の二つが並び行われるようになされた。百姓たちが鼓舞して、聖明の主だとたたえ、行宮に着かれた後からも、同じように徳を施されたために、温陽一邑はしずかで、安全であったから、英徳を祝って、讃嘆す

ることしきりであった。そのとき、小朝は実におだやかで、病患が消えうせ、本来の天性が戻って来られたかのようであった。しかし、わざわざお出かけになってはみたものの、温陽のようなちっぽけな村にどのような面白い景致があつて、壮麗な物色があるというのだろうか。十日あまりご滞在になると、またもや塞ぎの虫が起こつてしまい、八月六日にはお戻りになった。その後、今度は、

「温陽は憂鬱だから、平山に行きたい」

とおっしゃったものの、くり返して平山に行きたいというお話しをなさることもなく、平山は狭苦しく、憂鬱なのは温陽だけでもないと、お出かけになることもなくなって、そのまま、くさくさしていらっしゃった。春坊官や臣下たちは、

「大朝に拝謁なさってください」

と上書を差し上げたが、お行きになる様子はなく、そのことで大きな心配をしたことであつた。

大朝は世孫をしばしばお側に引き連れていらっしゃったが、小朝のことでだいに心配も重なつて、公の席においてもいつもため息をつかれ、おのずと宗社のために国を世孫にお譲りになることをお考えになるようになった。世孫は成長して、英明であり、その応対と行動が大朝のお心にも大いになつていらっしゃったから、愛情のこもつたおことばをおかけになることもしばしばであつた。小朝はいつも会議の議論を史官に記録させてご覧になつていたが、その中に世孫を誉めたたえて、

「国の大事を世孫に任せて見よう」

と、大朝がおっしゃったところに目をおとどめになつた。小朝は世孫を愛していらっしゃったものの、帝王の家の父子のあいだは昔からむずかしいもので、ましてご病気のご自分は幼い時分から慈愛をお受けにならなかつたことが恨みの至りとなつていらっしゃったのに、その息子だけがほめたたえられていたのでは、その激しいかんしゃくの中で、どうなさつたものであろうか。世孫の一身に宗社の存亡がかかつており、世孫が平安でいらっしゃることが国家の保全されることであつたが、世孫になにごともないようするには、その議事録を小朝がご覧にならないようにすることであつた。しかし、小朝は内官にいつけて、史官の書いた議事の記録をあらためてご覧になろうとなさつた。まさに危急のときであつたから、わたくしは内官に直接いつて、問題となる句節は削り取るようにさせたが、このことをお父さまは奇恃なこととお思いになつたようで、

「いかにも、世孫が平安にお育ちになることを第一にしよう」

とおっしゃった。お父さまは至極であった国家への忠誠によって、あちこちに周旋して、そうしたことは削って、外に書いて置くようになされた。お父さまはこの困難な局面に当たって、大朝の恩恵も深く、小朝も保護しようとして、また世孫のためにも平安でいらっしゃれるようになされたが、胸が焦がれるような心配が過ぎたときには激気が盛んになって、関格症がいつも起こるご様子で、わたくしをご覧になると、空を仰いで、国家の太平をお祈りになった。世孫を保護して宗社を維持できる要点がその議事の記録をご覧にならないということにあって、わたくしたち父と娘の焦燥というのも、人としての常理、人情というべきであり、その苦心と至誠は神明にもはっきりとしていよう。もしも小朝が、大朝が世孫を賞賛していらっしゃるおことばを文書の中にはっきりとご覧になったとしたら、世孫をめざましく思われて、どんな事態に立ち至るかわからなかった。

このようにして、辛巳の年(1761)となったが、ご病気はいよいよ重くおなりであった。大朝が宮廷をお移りになってからは、後苑に出て、馬に乗り、槍刀を振り回しては、日をお送りになっていたが、七月の温陽への旅行の後からは、後苑にいつも出られていたのが、それも退屈になって、不意に市中への微行をお始めになった。初めてのことであったから、おどろいたことといったらなかったが、そのおどろきをどう形容すればいいだろうか。そのご病気が現われると、人を殺してしまわれるのであった。お着物係りのヒヨンスの母が入って行ったところ、ご病気がいよいよ重くなっていて、その者を寵愛なさったこともお忘れになってしまうありさまで、辛巳の正月に微行なさろうと、衣服を着替えようとなされたときであったが、ご病気が出てしまい、その者を打ち殺して、お出かけになった。宮廷でこうした事故が起こって、その者の人生が惜しまれるだけではなく、その者には子どもたちがいて、その幼い者たちの様子は見るからに、むごいことであった。いつ帰って来られるかわからなかったが、死体を片時も放って置くことができず、その晩をほとんど明かして、送り出すことにして、龍洞宮において護喪の役を定め、喪事の費用を十分に与えた。後になって、東宮が帰って来られたものの、そのことについてはなにもお話しにならず、すでに精神はすっかりおかしくなっておられるようで、なにごともおわかりにならないようであった。正月、二月、三月と、微行をくり返されたが、出入りが突然のことであったから、わたくしはただただ恐ろしくて、慌てふためいたことはどれほどであったことだろう。

三月に世孫は入学して、その同じ月に冠礼が慶熙宮において執り行われた。母親

の自然な情理として、どうしてそれを拝見したくないということがあったろうか。しかし、小朝にお行きになろうという様子がまるでなかったから、わたくしひとりがどのような顔をして拝見しに行くことができたろうか。病を称して、参列しなかったが、そうした情理がいったいどこにあったろうか。その年の二、三月に続けて李天輔、李瑄、閔百祥といった三人の政丞が死んだ。王さまもお身体が思わしくなれないときに、大臣がいなくなって、三月にはお父さまが執政の命をお受けになったが、ご自身の立場やら国の情勢やらを考えれば、どうして本心から出仕をお望みであったろう。休戚の義と捨身の心でもって、そのとき、屋敷に下がっていらっしやったが、世の人々にはまったく理解してもらえそうになく、宗国のために断固として、一片の血心をもって身を投げうつこととし、国の存亡に賭しなされた。いったい、いつになったら、心配して恐れることもなく、また、いつになったら、焦燥して困り果てずにすむようにならうか。

三月の終りに小朝は平壤にお忍びで旅行をなさったが、これは、そのとき、西伯¹⁵⁾が翁主の媵三寸の鄭聳良¹⁶⁾であったから、そのようなことをしても、父王には知れないだろうと考えて、お出かけになったのだった。小朝ではないということにしてあったものの、監司は旅営の中でどうして気を落ち着けていられたろう。すこし離れて、営外で待令して、お食事と道中でお使いになるものをみな進上したが、肝腸を焼くように苦労したから、長林に出て来たときには、血を吐いたりしたのだった。その監司の心配は尽きず、朔の日城尉はいらっしやらなかったが、翁主を偏愛なさっていたから、恐ろしく思って、そのとき、不安におののいたことはどれほどであったろうか。その小朝の西行のあいだ、わたくしの心配は口に出すこともなかったが、お父さまは心配して、前後もわきまえず、それとなく、監司に連絡して、消息を知った上で、いつも宮廷にお出かけになったが、自宅に帰って来られても、床に座ったまま夜をお明かしになるご様子で、ご自身の心事はいかばかりであったことだろう。小朝がなさることを大朝に申し上げることはなさらなかったし、小朝をお諫めするつもりもどうしておありであったろう。お諫めしてすむのであれば、どんなお心でお諫めしないでいらしたことであろう。たとえ、お諫めしたとしても、お聞き分けになる道理はなかった。連座して、ご自身の身も安全でなくなって、子女たちまでどうなることかわからないから、お諫めにならなかったというわけでもない。小朝はまったくご病気でいらっしやったから、ただ一心に世孫だけでも保全しようと心を砕かれたのだった。それを知らない者たちは輔導を誤った

として責めたてたけれど、だれにこうした苦衷をお話しになることができたろう。ただ遭遇なさったのが、まことに危険な事態で、そのことがくやしく、恨めしく思われるのであった。

西行なさって、二十日あまりたつて、四月二十日ごろにはお帰りになった。その間、露見しないか不安であったが、かえって、どうということもなく、西行の間は、ご病気でいらっしゃるということにして、内官の口を固め、長番内官の柳仁植が下の部屋に眠り、小朝のこぼを装って、朴文興がさまぎまのことについて応答した。そのことが知れたらと思うと、恐ろしく、気が気ではなかった。そのとき、尹在謙の上書が出て、お諫めするのは臣下の分として当然のことではあったが、小朝はご存じになる状況になく、大朝がご存じになれば、どんな変事が起こるかかわらなかった。今や小朝をお諫めすることすらむずかしくなっていたのだった。西行の後、小朝はわずかに平静をお取り戻しになったようで、次対もなさり、講筵もなさり、なんとか気持ちを鎮めようとお努めになるご様子はけなげなほどであった。その後、次対において啓禱がなにごとかを申し上げ、それに対して命令をきびしく下されて、漢の江武の故事まで引かれた様子は、ご病気ではないようでいらっしゃったので、お父さまはたいへんお喜びになって、帰って来るや、すぐにそのことをわたくしにお話しくくださったのだった。

五月十日の後、初めて、慶熙宮におもむき、大朝へお見舞うかがいなさったが、天の幸ともいうべきか、つつがなく、戻って来られた。わたくしも、十五日ごろ、世孫といっしょに慶熙宮に参って、大朝に拝謁して、宣禧宮にもお会いしたが、胸が塞がってしまい、一言もお話しできなかった。小朝は六月におこりを患われて、数カ月を心配な状態でお過ごしになったが、その年は春から微行などなさったことで、玉体をそこなつて、その病が現われたのであったろう。わたくしにとってはこのことが、人事として不思議でもあり、万古にないことをご経験になって、そのご病気によってお亡くなりになるとすれば、離別の痛みこれにまさるものはなかった。ご自身の悲しみと妻子の恨みがこのようなままで、世間の悲しみと人々の痛みと、さらにはわたくしの一家の悲しみもこのような極点に至ってしまったのでは、天道がいったいどこにあるのか理解できないことであった。八月におこりの症状が盛んで、九月になって、大朝は承政院日記をとつてご覧になって、徐命膺の上書に東宮の西行のことがあるのを、初めてご存じになった。そのとき、一幕の風波があったが、大きな変事に至らなかったのは、ひとえに鄭暉良の尽力による。

小朝が昌徳宮へお移りになることになって、そのとき、内官もお置しになったが、どうしてそのままに放って置くことができたろう。わたくしは、幼いころから、大朝のなさることを見聞きして来たが、小さなことにわずらわしいほどに細かくこだわって、事が大きく重い事柄になると、なぜか、小事に激怒なさるのにくらべると、穏やかといつていいほどであった。小朝が人を殺生なさったという話しをお聞きになって、

「心に痛みがあって、そうしたのであろう」

とおっしゃって、かえって、お慰めになったのに、西行をお知りになるや、お怒りとその処分はいかばかりであったことか。後にはそのようにお叱りにはならなかったが、事があまりに重大であったから、そのままにして置かれたのだった。そのとき、お移りになるよう命令が出たので、ご自身が散らかしていらっしやった武器、諸道具をみなおしまいになって、ご自身もご無事ではないご覚悟で、環翠亭¹⁷⁾にいらっしやった。わたくしは何年ものあいだ、小朝から情のこもったおことばを聞いたことがなかったが、その日は、わたくしに、

「決して無事ではすまされまいが、いったいどうすればいいだろう」

とおっしゃった。わたくしは気持ちが塞いで、

「お気の毒ですが、よもや、どうなさろうというおつもりですか」

とお答えした。すると、

「どうしたものか、世孫はおかわいがりになって、世孫はいるが、わたしはまるでないかのようにお扱になる。世孫はわたしの息子であるのに、父子が禍福を同じくしないというのは、いったいどういうことだ」

とおっしゃった。また、

「おまえには考えが及ぶまいが、わたしをお嫌いになることがいよいよはなはだしく、わたしをわずらわしくお思いのようだ。わたしを廃して、世孫を孝章太子の養子とすれば、どうであろうか」

とおっしゃった。そんなお話しをなさるときは、ご病気の様子ではなく、冷静にお話しになったが、そのおことばが気の毒でたまたま、悲しくて

「そのような道理がどこにございましょうか」

と申し上げた。すると、また、

「今に見て置くがよい。おまえはかわいらしく、わたしにとっても好ましい人物だが、おまえと子どもたちはかわいそうだとして、わたしだけをあれこれなさる

ことになろう。病がこのように重くなって、どうして生きていけようか」とおっしゃった。わたくしは、あまりにお気の毒で、泣きながら聞いていたが、甲申の年(1764)に、悲しく、恨めしく、痛ましいことに当たって¹⁸⁾、そのときなさったお話しを思い出すと、未来をよく推量なさって、その日、そのようなことをおっしゃったのが、尋常のことでなく、靈魂によってお見通しであったことが、ひどく、むごいことにも思われる。

忍び歩きをなさないようになって、禍の気配がややおさまったものの、ひとたび、外の見物をなさると、病状はそのまま募った。十月になって、また重くなって、心配であったが、世孫嬪を選ぶことになった。清風金氏の家¹⁹⁾は大家徳門といつてよく、金判書聖応の大夫夫人²⁰⁾の還暦のお祝いの宴にお父さまはお行きになったが、そこで、大妃殿²¹⁾の幼な姿をご覧になって、尋常ならざる資質であるというお話しをお聞きになっていた。処女単子に金判書時黙²²⁾の女と書かれているのを、小朝はご覧になって、おおいにお気に入りのおようであったが、翁主にお便りを差し上げて、この者でないようなら、知らせるようにおっしゃった。ところが、尹得養の娘に大朝のお心が傾いて、宮中の意見もそちらに傾いたようであったが、小朝はお行きになることがなかったから、わたくしもどうしてわざわざその場に出かけよう。

わたくしはわが子を慈しむ天倫のほかには、おのずから別の情理によっても、その花嫁選びに関わらないことが気掛かりであったが、そうした自然な情を抑えて、寒々とした心を抱いたまま過ごし、東宮もあきたりないと心配なさっていたものの、やはり金氏に決まって、おおいにお喜びになった。二度目のお目見えがあつてからすぐ、世孫嬪は痘病におかかりになって、続いて世孫も同じく痘病におかかりになったが、十二月の十日ごろには回癒なさった。大朝はたいへんご心配になっていたが、ご回癒をお喜びになり、小朝もまたお喜びになって、あれこれと注意なさっていたが、そういうときには、まったくご病気のようにはいらっしゃらなかった。わたくしは他の人にはない情理でもって、重いご病気に手を合わせて、太平にご回癒なさることを、天地神明にお祈りしたが、そのことと、お父さまが宿直して、昼夜にお気遣いなさったまごころは、くり返していうまでのことがあろうか。祖宗の神霊がお守りしたのか、両宮ともに次々と順調におなおりになって、十二月には三度目のお目見えとなった。その慶事をどう形容することができよう。

三度目のお目見えのときには、父母にまみえないわけにはいかないとして、小朝

とわたくしを出席させなさったが、世孫とその嬪宮を見ることはまことに喜ばしかった。しかし、小朝はやって来られたのはいいが、態度が陰鬱で落ち着きなく、気もそぞろといったご様子であった。小朝は例の衣帯症によって何度も着替え、網巾²³⁾を何度も替えて、玉貫子²⁴⁾も気に入らずに何度も取り替えたすえに、やつのことで、その日は細工のたくみな通政玉貫子²⁵⁾を帯びてお出かけになった。思賢閣において大朝と小朝とがお会いになったところ、その通政玉貫子が虎斑の貫子のようにであったから、その場にふさわしくなく、王世子らしからぬものとされたが、そのことがどうして大事に至らなければならなかったのか、まだ妻子がやって来ない前に、その貫子のことで、大朝は怒りを発して、お叱りになったので、そのまま席に出られず、帰ってしまわれた。そのことがまことに悲しく、そこまでなさらなくともいいのではと思われたが、東宮には花嫁をご覧になることもなく、そのお気持ちはいかばかりであったろう。そのようなことがあったにもかかわらず、かんしゃくを起こさずにうやうやしく身を処すことがどうしておできであったのだろうか。わたくしは後に死ぬことになってもいいという覚悟をもって参席し、世孫嬪を拝見することができたが、小朝が三度のお目見えで一度もお見えにならなかったことは、薄情なことのようにでもあり、あるべきことでもなかった。中宮、宣禧宮、翁主などは、

「別宮への路は昌徳宮を通ります。王さまには申し上げずに、むやみにお連れするのはおそれおおいけれど、おそらくは拝見できることでしょう」

とおっしゃって、議論はそんなところに落ち着いたのであった。そこで、近侍の内官に、

「下の宮廷を通るときに、わたしの輦といっしょに入るようにしてほしい」

といいつけて、世孫嬪をお連れした。小朝は世孫嬪をご覧になることもなく下がって来られたために、気分がすぐれず、そこはかたなく悲しくて、徳成閣で息を潜めてぼんやりとしていらっしゃったが、

「世孫嬪を連れて参りました」

と申し上げると、うれしそうに起き上がり、その花嫁をいたわって、格別に愛なさって、晩になると、別宮にまでお送りになった。事勢が許さず、花嫁をお連れして舅のご覧に入れることにしたのは、大朝をおだまし申すようで、おそれおおいことではあった。小朝は日に日にお気の毒な様子で、日に日にご病気が募り、大朝に対してなさる不敬のおことばがしだいにとどまるところを知らなくなっていったか

ら、それがまた心配の種となった。

昼夜に心は恐れおののき、わたくしの生命もいつなんどき、どうなるかわからなかったが、なんとか結婚の大礼が滞りなく行われるようにと心を砕いた。とうとう、年が替わり、壬午の年(1762)となって、嘉礼は二月二日に行われることとなった。はやく日が過ぎて、嘉礼が順調に行われるのを待ち望んでいたが、正月十日過ぎに、突然、大朝には喉が痛み、その症状が決して軽くはなく、大事が迫っているのに、どうしたらいいか、もどかしく思われたが、針をお受けになって、すぐにおなおりになったのは、まことに万幸というべきであった。嘉礼の期日がすでに迫っていたから、きわめて重い人倫のことを廃止せずすんだのであった。その二日の日に、

「世孫を連れて参るように」

とおっしゃると、世孫はすぐにお行きになり、小朝も早々と参上なさったが、崇賢門の外でしばらくお休みになった。景賢堂において婚姻の儀式は行われ、一堂に祖、子、孫の三代が集まって、孫の嘉礼を執り行つて、奠雁²⁶)を行った。その儀式の華やかさと慶事の壮麗さはとてもことばに言い尽くせないほどであった。醮礼の後、大礼は光明殿において行われた。小朝は緝熙堂にお泊りになり、世孫と世孫嬪は光明殿で一夜を過ごされ、翌日には、両殿すなわち王および王妃、そして両宮すなわち東宮および東宮妃が一殿において世孫嬪の朝見をお受けすることになった。王および王妃は光明殿の北壁の椅子にお座りになり、東宮の座席は東側に、わたくしの座席は西側にしつらわれた。

世孫と世孫嬪はまことに幼く、歩くのもたどたどしいほどで、そのお目見えのあいだ、おふたりはたがいにもじもじと下を向いて向かい合っていっしやるだけであった。たがいにご覧になることが照れ臭いようで、お話しをなさることもなかったから、そのご様子がいささか気にかからないでもなく、わたくしはそれを拝見して、前に進み出て、世孫嬪をうながして、前に進ませ、棗栗飯と遐寿飯をもたせて、両殿、両宮におごそかに差し上げるようにさせた。まことに太平かつ万幸なことであった。小朝はお加減が悪いようで、三日目になって退出しようとなさったが、そのときには、ご病気の様子でもなく、ご自身で応接なさって、その上で退出しようとなさったから、王さまのお心にも、国家の重大な礼に欠席することもなく、朝見までなさったので、それを嘉として、東宮行次令をお出しになった。わたくしだけは三日目も見て行くようにとということであったが、わたくしひとりだけがとどまる

わけにも行かず、口実をもうけ、ほとんど追いかけるようにして、退出したのであった。世孫と嬪宮は三日後に昌徳宮にお下がりになった。小朝は心待ちにしておられて、お喜びになり、嬪宮をお呼びして、徽寧殿においてお会いになったが、感激なさることひとしおであった。このようなときには、本性が現われて、その花嫁をはたして尋常ではないほどに、おかわいがりになった。大妃殿の特別な愛情をお受けになって、幼いながらも、喪事後の悲しみははなはだしく、歳月が経つにつけても、追慕の気持ちちが募って、話しが出ると、涙が流れ出ないことはないというのも、かわいがられたという理由からであったが、孝誠のお気持ちちがなければ、どうして、このようであつたらう。

近年は、小朝はお父さまとわたくしの場でお会いになることもなかつたが、そのおり、お父さまが北道陵奉審²⁷⁾として旅にお出かけになることになった。大朝がわたくしに会い、さらに世孫嬪に会って行くようにとおっしゃったから、お父さまは下の宮廷にやって来られたが、小朝はその日はお加減もよろしかったようで、お父さまにお会いになって、花嫁自慢などをなされた。もともと、小朝はお育ちになる過程で、輔養官や春坊官たち以外に、親密におつきあいする縁戚といったものがなく、外部の人間を近くに呼んで親しく語らうという機会もおもちではなかつたが、わたくしとの婚礼の後にお父さまにお会いになり、語り合つて、親しくお交わりになったのであつた。お父さまは月の一日と十五日にお見舞いに伺われることになっていたが、王さまのご命令があつて、やって来られても、長くはおとどまりになることができずに、

「禁令がきびしくて、外の人間が長くとどまることはできません」

とおっしゃって、すぐに出て行かれた。小朝にお対しになるとすぐに、ただただ勉強なさるようお勧めして、歴史を懇切にお教えになり、学問のある古人の文章をしばしば書いて差し上げ、小朝が文章をお作りになれば、添削をして差し上げて、小朝がお父さまにお学びになることはまことに多大であつた。

お父さまが千万年の将来を鑑みて、小朝が太平聖君となられるようにおおいに願つたまごころは、ほかのどの臣下が万が一にももっていたものであろうか。大切にお仕えしていささかの間隙もなく、しっかりと後見することはたしかに正しいことであつて、縁戚たちがあるいは玩具などで遊戯なさるようにして差し上げるのが常例であつても、お父さまはそうしたお気持ちちがさらさらなく、お伺いすれば、始めから終りまで、毎度のように、

「孝道をお尽くしになるように」

と申し上げ、また、

「学問に真剣にお取り組みください」

と申し上げて、この二つのことのほかには、また別のことはお申し上げになることがなかった。小朝を大切に思われた上に、はなはだ期待もなさって、いつも気を配っていらっしゃったが、ご病気がしだいに重くなるに連れて、お父さまにお会いになってあれこれとお話しになることもなくなって行った。事態の困難さが増して行ったが、なんとか事態をよくしようと、わたくしが手紙に書いたり、またご自身が書いて送られるようなこともなくなって、小朝はその衣服のご病気によって、死生竿頭といった状況に立ち至ってしまったのだった。お父さまには、わたくしが、

「衣服をご用意ください」

と申し上げたが、小朝はあえてお求めになることはなかった。錦城尉と鄭氏の妻はもって来られたが、わたくしの家のものはもう一つももって来ることがなくなったので、微行をお始めになったときには、わたくしの家にならずお立ち寄りになるおつもりだったのに、錦城尉の家に行ってお準備になり、わたくしの家には一度もお立ち寄りになることがなかった。こんなことには、お父さまはいつになく応接もなさらず、むずかしくお考えになって、忌みはばかれたのであつたらう。その間、おかしなことが多く、微行なさったことも、ご自身照れ臭く思われたのか、お父さまにお会いして、お話しになることもなかった。

公の場での次対ではお会いして、大朝のご病気のときは代理同然に入対していらっしゃったから、そのおりに顔も合わせていらっしゃるものの、私的にお会いすることはここ数年ないままお過ごしになっていた。お父さまは、その日、小朝を拝見してうれしく、妙年にご子息に花嫁をお貰いになったことが喜ばしく、その世孫と世孫嬪の両宮がご自身をご覧になるさまも愛らしく、喜ばしくて、お祝いを申し上げなさった。それに対して、小朝も平生のままに應對なさって、すこしもご病気の症状が現われなかったのは不思議で、かえって、うらめしくも思われた。

三月には、小朝のご病気がいっそう重くなって、もうすっかり望みが持てなくなった。その悲しみを筆でどう記すことができようか。かんしゃくが起これば、内官や内人たちにとでも口にするのをはばかるようなことをおさせになる。その者たちが殺される時、おびえながら、声を荒げて、不道であることを説いたが、わたくしはといえば、ただ天が恐ろしく、千万回も気を失って、その者たちの死ぬのも

知らなかった。小朝はお酒はたしなまれない。というのも、丙子の年(1756)に酒に関して濡れ衣を被ったことが恨みとなって、大朝がおっしゃったとおりにきびしく禁酒なされたし、酒をこっそりと差し上げたところで、もともと酒量は少なく、ろくにお飲みにもならなかった。宮中で酒を飲むことだけを狼藉だとして禁止したところで、他のどんなことが心配ではなかったろう。

庚辰の年(1760)以後、内官、内人をお殺しになることが重なった。そのいちいちを記憶してはいないが、表だったところでは、内需司次知の徐京達を内需司のあれこれのことで気に入らずにお殺しになって、出入りの番をする内官も何人かをお殺しになり、また、宣禧宮付きの内人もひとり殺してしまわれ、いよいよ状況は危うくなって行った。辛巳の年(1761)の徼行²⁸⁾のときには尼さんをひとり、さらに関西への徼行²⁹⁾のときには妓生ひとり連れて行かれたが、それをそのまま宮中に留めて置かれた。宴会でもなさろうというときには、情をおかけになった宮中の女奴隷たちや妓生たちがやって来ては、みだりがわしく交わりあった。万古にそうした光景がいったいどこにあったらうか。

二月の終りに、翁主をお呼びになったので、よいように取り計らってお連れした。ご自身のご病気がつらくて、お連れしろとおっしゃったものの、翁主もおびえなさって、その場にいたたまれずに、うやうやしいとはいえないことばを口に出されたようだが、わたくしはそれをはっきりとは聞いていないことが、かえて幸であったかもしれない。翁主をお呼び付けになって、通明殿で宴会をなさったが、宴会の場所は後苑でなければ、通明殿でなさることになっており、そのままお泊りになるとときには、環翠殿でもなさった。三月はそうしてわけのわからない状態で過ぎて、四月になった。居処のありさまのいっさいがどうして生きた人の住むところのようであったらうか。まるで死んだ人の殯の場所のようで、紅の旗のようなものを作って立て、棺のようなものを置いて、その中にお休みになった。宴会をなさった晩も深まれば、上下のものみながくたびれて眠り、床の上にはあたり一面に食べ物が散らかって、その光景はみな鬼神のさせることで、天のさせることであると考えることができない。

盲人たちも召して、印を付けて置き、その者たちがなにかことばを過せば、お殺しになることもあり、医官、訳官、掖属といった者たちには、死ぬ者たちがいて、病身になる者たちもいたが、ある日も、宮中で死んだ人間を何体も片付けるようなことがあったから、内外の人心は戦々恐々として、いつ何時殺されるかわからず、

ぶるぶるとふるえ上がっていた。ご自身の天質はまことにご立派であったはずなのに、その穏やかだった本性を失ってしまわれて、まったく困り果てたことになってしまったが、それをどうことばにしたらいいだろう。

五月になって、小朝は、突然、土を掘って、そこに三間の室をお作りになった。あいだには障子を立てて、とうとう墓室のようにしてしまい、出入り口を上に乗って、大きな板で蓋をして、人の身体が出入りだけできるようにして、その蓋の板の上は芝土でおおい、土の中に家があるような痕跡もないようになさった。そのように墓室をお作りになって、その中に玉燈を灯して吊し、じっと座っていらっしゃった。父王がいらしゃって、小朝がなさっていることをお調べになったとしても、武器のたぐいは、馬に至るまで、みなお隠しになっていて、お見つかりになることはなかったが、その土中の室のことは心配でならなかった。しかし、これもみな、まがまがしい兆しを鬼神が示したまでのことであり、人力でいったいどうすることができたらうか。

その月に宣禮宮が世孫の婚礼の後に初めて世孫嬪もご覧になるかたがた、下の宮廷にお下がりになった。小朝はお喜びになって、うやうやしくおもてなしになることが目にあまるほどであったが、それはあらたまつたお気持ちから、終のお別れのおつもりで、そうなさるのかもしれない。食べ物や宴会の盆に並べられた物はそれはそれは豪華で、果実を高く積み上げて、人参果までご用意になり、寿席の詩までみずからお作りになって、杯をお交わしになり、これで残したことはないといわんばかりにおもてなしになった。後苑にお出になるときは、籠を大輦のようにしてお勧めして、宣禮宮がためらいなさるのもかまわずにむりやりお乗せして、前に大きな旗を立て、軍樂を演奏させて、お出かけであった。そのご様子は、ご自身は親孝行のおつもりであっても、宣禮宮にとっては小朝のご病気であることの証しに他ならなかったから、なす術もなく、どのようなお気持ちであったか推し量りようもない。わたくしに對しなされば、涙をお流しになって、おののきながら、

「どうしたものでしょうね」

といて、嘆息なさった。数日のあいだお泊りになって、お戻りになったが、お母さまも泣かれ、ご子息もたいへんに悲しくて、終天永訣のおつもりで、そのようなことをなさったようであったが、わたくしは日に日に危険が増して行く中で、生きてふたたび宣禮宮を拝見することができるかどうか、心が切り取られるようであった。

そのころ、領相の申晩が、喪が明けたので、ふたたび政丞となった。大朝は三年のあいだお会いにならなかったもので、初めての人にお会いになったかのように、くり返しお話しになることといたら、東宮に関することばかりであったから、小朝は申晩のせいでご自身の凶行が露わになるように思われて、

「あの政丞には福がなく、憎い奴だ」

とおっしゃって、しだいに申晩を憎む一方で、また恐ろしくもお思いであった。申晩が大朝にどんな讒訴をするかと切齒なされたから、そのためいつそう禍をかきたてることになり、だんだん取り返しのつかないことになっていった。そうした危機の中、思いがけなく、羅景彦のこと³⁰⁾が起こったが、当時、刑曹参議はといえば、わたくしの外四寸の李海重であった。景彦の弟の尚彦という者はどのような凶心をもってそのようなことをしてかしたのか、事態にさらに悲しみを加えたことは、くらべるものとしてないほどであった。大朝は景彦をみずから尋問なさることになって、小朝をお呼びになったので、慌てて、歩いて、上の宮廷に参られたが、そのご様子はいかばかりであったろうか。悪いことには悪いことの重なるもので、凶悪な輩が現われ出て、ご病気はいよいよ重くなって、くらべるものとしてなく、父子のあいだもますます険悪で、ことばにもできないほどである。

景彦を死刑に処すことにして、小朝は弟の尚彦を捕まえ、時敏堂の遜志閣の庭で拷問して、教唆した者を尋ねたが、自白しなかった。その事件によって、小朝は領政の申晩をいよいよお恨みになって、父親の罪によって永城尉³¹⁾を捕まえて、殺してしまおうとなされた。そのときの禍色はことばにもできかねるほどで、永城尉を今日捕まえようか、明日捕まえようかと思っていらっしゃったが、人々は永城尉を殺さないですませようとして、すぐに捕まえて来るようなことはなかった。宣禧宮は小朝のなさがることがしだいに限度がなくなって行き、また翁主に対してもつらくお当たりになって行ったので、お手紙に書かれることも悲しいことばかりであったから、ここに書き留めることもできない。小朝は、

「排水口を通して、上の宮廷に行って見よう」

とおっしゃって、ますます永城尉に目に物見せてくれようとお考えになった。たとえ本人を捕まえて来ることはできないにしても、永城尉の官服、朝服、戎服、日用の道具、そして佩玉や帯に至るまで、みなもって来させて、火にくべて焼き、永城尉の生命もまさに呼吸の間というところであった。宣禧宮は永城尉を必ずしもたいせつにはなさっていなかったものの、しだいしだいにこんなことになって行って、

不憫だと思ってお心だけはおもちであり、小朝のなさがることが極点に達するようになって、悲しみでいっぱいにおなりであった。

小朝は上の宮廷に排水口を通して行こうとなさったが、お行きになることができず、通路を使ってお行きになった。閏五月の十一、二日の間のことであった。そうしたことに立った噂が騒ぎ立てられ、誇張されて広がらないでいようか。小朝の振る舞いは狼藉極まりのないものであったが、前後のことみな本心からなさったのではなく、正気をお失いになっているときには、かんしゃくを起こし、大騒ぎして、はなはだしく病的になって、刀を振り回して人を殺そうとなさったが、すこしでも正気をおもちになっていれば、どうしてそんなことをなさったろうか。ご自身が、尋常でなく、かつ険悪なる運命によって、天命をみな尽きさせ、万古にない残酷な事態に当たられる運命であったのであろうか、天はあまりにも凶悪な変事を出来させて、お心もそのように作ったのであろう。天よ、天よ、いったいどうして、このようなことをなさったのか。

宣禧宮は病に冒されたご子息をいくら責めたところで、どうすることもできず、ただ慈母のお心で、他には子息がなく、このご子息にだけ生命をお賭けであったから、いったいどうしたものか、皆目おわかりにならない。最初に十分に愛情をお受けにならなかったために、このようにおなりになったわけだから、大朝に対して恨みがないとはいえ、それがご自身にとっても終身のお心の痛みとなっていってしまった。すでに小朝のご病気がこのように進んでしまって、父母の見分けもつかない状態となつては、私心ではとてもどうすることもできず、ぐずぐずなさいたところ、とうとうご病状が危急となって、水と火の見分けもできずに、とても考えられないようなことを仕出かしなさいた。いったい朝鮮国四百年の宗社をどうなさるおつもりであったのか。ご自身の道理としては、お身体を大切にするというのが大義としては正しいが、すでに病によってそれができないとすれば、むしろ肉体がない方がよいとお考えになった。すでに孝宗、顯宗、肅宗と続いた血脈は世孫によって受け継がれていて、千万回、愛着はあっても、国を保全するには、他の方法はないとお考えになったのだ。十三日にわたくしに手紙をくださって、

「昨夜の噂はいよいよ恐ろしいことになってしまった。事がこうなってしまうのは、わたくしが死んであざかり知らないことにするか、生きて宗社を乗っ取ることにするか、ただひとえに世孫を救うのが正しいか。ともあれ、わたしは生きてふたたびあなたにあいまみえる術を知らない」

とだけしたためてあった。わたくしはその封書を握り締めて、啼泣したが、その日、あの大変事が起ころうとは、どうして知っていたらうか。

その日の朝、大朝はなにかのことで親政の席にお出になろうとして、景賢堂³²⁾の観光庁にいらっしゃった。すると、宣禧宮がいらっしゃって、泣きながら、

「小朝の病がしだいに重くなって、望みもなくなってしまいました。わたくしとしては、とても情理にかなわないことではあっても、王さまのお身体を保全し、世孫を救い、そうして宗社を平安に保つことが正しいと思います。いたしかたございません。大処分をなさってください」

とおっしゃり、また、続けて、

「父子の情として、このようなことにおなりでも、原因は病にあって、病をどうして責めることができましょう。たとえ処分はなさっても、どうか恩恵を及ぼしてください、世孫母子を平安にお助けください」

とおっしゃった。わたくしはその妻として、夫が処刑されて、それを正しいとすることのただひとり決してできない立場であった。わたくしは、だから、死んでしまっ、なにも知らないでいられればよかったのだが、世孫がつつがなくお育ちになるまでは、とても死ぬことを決断できかねて、遭遇した事態のまがまがしさに恐れおののくだけであった。

大朝はそれをお聞きになるや、すこしも遅滞なさらず、自死すべきであるととおっしゃって、昌徳宮へお移りになるようご命令を急にお出しになった。宣禧宮は母親としての愛情も人情もお捨てになって、大義としてお話しになったものの、事が決まってしまうや、胸を痛め、ほとんど気絶せんばかりのご様子で、ご自身のいらっしゃった養徳堂に行って、食事もとらず、横に臥してしまわれたが、万古にこうした情理がどこにあったらうか。

小朝が昌徳宮の瑞源堂にお行きになる道は二通りあったが、万安門を通って行かれるのには故障がなく、景華門を通るのには故障が生じた。ご命令は景華門を通って行くようにというものであったが、小朝は十一日の晩に排水口を出入りしたために、身体を水に浸らせて、十二日には通明殿にいらっしゃったが、その日、大梁が折れたような凄まじい音がしたのをお聞きになって、嘆息して、

「わたしが死のうとしているときに、これはまたどうしたことであろう」とおっしゃった。

そのとき、お父さまは宰相として初めて、五月に嚴重なる戒めを受けて、職を罷

して、東郊に一カ月あまり出ていらっしやった。小朝はご自身の身の上が危機に瀕しているのを悟り、趙戴浩が前任の大臣として春川にいたのを、桂坊の趙維進をやって話しを伝えて、上京させようとなさった。こうした判断を見ると、ご病気でいらっしやるようではなく、すべて異常なる天の所為といてよかった。お移りになるようご命令が下りて、小朝は恐懼して、ひとことのことばもなく、道具や馬をみなこっそりと指図したとおりにおさせになって、お籠に乗って景春殿の後にお出になり、わたくしに来るようとおっしゃった。近来、小朝の目に人の姿が映るやいなや、事が生じることが多いので、籠は閉ざしたまま、四面に覆いをしてお出になられた。その日、小朝はわたくしを徳成閣にお召しになったが、そのときちょうど正午で、突然、無数の鵲が景春殿を取り囲んで鳴いた。これはどのような兆しなのか、不思議なことであった。世孫は欽景殿にいらっしやったが、わたくしの心は恐れおののき、世孫のお身体がどうなることか心配であったから、そちらにうかがって、世孫に、

「どのようなことがあっても、決しておどろき騒ぐことなく、お気持ちを冷静にお保ちになるように」

と申し上げた。とはいうものの、わたくしもあれこれと思い迷い、いったいどうしたものか見当もつかなかった。どうしたわけか、お移りになるのが遅れて、未の時刻の後に徽寧殿に出られたという話であった。そのようなときに、小朝はわたくしに徳成閣に来るようにと催促されたわけだが、行って拝見すると、すでに壮な気運もなく、不快なことばもおっしゃらずに、ただ首をうなだれて、沈思黙考して、壁にもたれて座っていらっしやった。その顔色は青白く、血の気が引いているようで、わたくしをご覧になった表情は、まさに発作が起こる寸前のようであった。わたくしはその日に生を終えることになるのも覚悟の上で、世孫に対してくれぐれも教戒を与え、幸せになるよう願って来たが、小朝のおことばと雰囲気はわたくしの心配とは相違していて、

「どうしてもうまくいかなかったが、あなたはしっかりと生きながらえるように。それにしても、なんという恐ろしさだ」

とおっしゃった。わたくしは涙を流して、ことばもなく、心もからっぽで、手をすり合わせながら、座っていたが、このとき、大朝が徽寧殿にいらっしやって、小朝をお呼びになっているという伝言がやって来た。そのようなときになっても、不思議なことに、「避けたい」ということばも、「逃げたい」ということばもなく、左右

の者にも気をお配りになって、いささかも発作をお起こしにならない。さっさと龍袍をもって来るようにおっしゃって、お着替えになり、

「わたしはおこりを病んでいるので、世孫の防寒帽をもって来てほしい」とおっしゃった。わたくしはその防寒帽では小さ過ぎるので、ご自身の防寒帽をお使いになる方がいいと思って、内人にもって来させたところ、思いの外にすぐに、

「あなたはまことに恐ろしく、ずるがしこい人間だ。あなたはこれからも世孫といっしょに長く生きるというのに、今からわたしは出て行き、殺される。それが忌まわしいので、わたしに世孫の防寒帽を使わせたくないというのだな。よくわかった」

とおっしゃった。わたくしは、その日ご自身がそのような心境に至っておられたことを知らなかった。またこの事態がどうなることやらわからず、人がよもや死ぬこととなって、またわたくしたち母子の生命すらあわやどうなるかということになって、意外千万のおことばであったから、わたくしはぞっとして、世孫の防寒帽を取って来させた。

「おことばがあまりに意外でしたので、これをもって来させました」と申し上げると、

「ああ、いやだ、いやだ。いやがっているものを、どうして被れよう」とおっしゃった。こうしたおことばがどうしてご病気にかかっていらっしゃるようであったろう。はなはだ恭順な態度を示しておいでであったが、これもみな天の所為であって、痛ましかぎりであった。そのようにして、時間も遅くなり、催促が頻りに来て、お出になったが、大朝は徽寧殿にお座りになって、みずから剣をたずさえて、なぐりつけながら、小朝の処分をしようとなさった。とてもとても悲しくて、その様子は、わたくしはとてものことに、書き記すことができない。ああ、なんと悲しいことであろう。

小朝が出て行かれて、大朝が激怒なさっているお声が聞こえた。徽寧殿は徳成閣とは遠くはなく、堀の下から人をやって見させたところ、はたして、はやくも龍袍は脱がされ、伏せていらっしゃり、大処分であることがわかったので、天地が動転して、胸腸が崩れて裂けるかのようにであった。そこにはとてもいたたまれず、世孫のいらっしゃるところへ行って、たがいにしつかと抱きあって、どうしていいかもわからないでいたが、申の刻のころに内官がやって来て、外の焼厨房にある米を入れる櫃を運ぼうとした。どういうことかわからず、気もそぞろで、外に出ること

もなかったが、世孫宮は悲しいことのあるのを知ってか、門庭の前に出て、

「お父さまをお助けください」

と叫ばれたが、大朝は、

「こちらに来てはならない。出て行け」

と、きびしく号令なされた。世孫はなす術もなく、王子齋室に座していらっしゃったが、そのときの情景は古今東西、天地の間にないものであった。世孫を抱きかかえてお出ししたが、天地が塞がって、日月ともにかきくれ、わたくしはどうして一時でもこの世にとどまりたいと思ったことであろう。刀を執って、命を絶とうとしたが、かたわらの者が刀を奪い取って、意のままにならず、ふたたび死のうとしても、あたり寸鉄もなく、かなわなかった。崇文堂を通って徽寧殿へ出る建福門という門の下に行ったものの、なにも見ることができず、ただ大朝が刀でなぐりつけていらっしゃる音がして、小朝が、

「お父さま、お父さま、悪うございました。これからは、お心にかなうようにして、書物も読み、お話しもちゃんとうかがいます。だから、こんな目に遭わせないで、どうぞお許してください」

とおっしゃる声が聞こえて来た。その声を聞いていると、肝腸が寸々に切り刻まれるようで、目の前が真っ暗になり、胸をいくらたたいたところで、どうしようもない。ご自身の勇氣と壯氣をふるってみずから櫃にお入りになったが、いくら入るまいとなさったところで、畢竟、入らざるをえなかったのだ。最初は飛び出ようとなさったものかなわず、とうとうあきらめの境地に至られたが、天がどうしてこのように仕向けたものか、万古にない悲しみであって、わたくしは門の下で号泣したが、それに応じなせることはすでになかった。

小朝がすでに廃されていらっしゃるのに、その妻子がなにごともないかのように宮廷にそのままいるわけにはいかない。世孫を外にお出ししてしまうと、その後どうなることか、あまりに恐ろしく、心配であったから、その門のところに座ったまま、大朝に上書して、

「処分をこのようにお決めになったからには、罪人の妻子がなにごともなく宮廷にいては、おそれ多うございます。世孫を長らく外にお置きすれば、そのことで罪の重なる身となることが恐ろしいございますが、ただいまは、実家に帰らせていただきとうございます」

としたためて、やっとのことで内官をつかまえて、もって行かせた。まもなく、お

兄さまが現われて、

「ただいまは、あなたは庶人となられたので、宮廷にとどまられることはかなわず、実家に帰るようというのであった。あなたは籠に乗って、世孫は籃輿にお乗せして、そうしてお帰りになるようというのです」

とおっしゃった。たがいに抱き合って、悲しくて号泣したが、背負われて、清輝門から儲承殿の差備門に出て、そこに籠を置いてあったから、尹尚宮という内人がいっしょに乗り込んだ。別監が籠を担いで、あまたの上下の内人がみな後を追ってついて来て、慟哭したが、万古天地の間にこうした光景がいったいどこにあるであろう。わたくしは籠に乗るとき、気持ちが動転していたので、挨拶もできなかったが、尹尚宮がよくとりなして、やっとのことで戻って来ることができた。実家に戻ってからというもの、わたくしはコンノンバン³³⁾に臥したきりで、世孫はわたくしの仲父とお兄さまがお世話して過ごし、世孫の嬪宮はあちらの屋敷から籠に乗って清衍といっしょにやって来られたが、その悲しい状況をどう生きながらえたものであったろう。わたくしは自決しようとしても、とてもできない。よくよく考えれば、死ねば十一歳の世孫に度重なる悲痛を残すことになり、また、わたくしがいなければ、世孫はどのようにしてお育ちになることができようか。耐えがたきを耐えて、母親としての生命をまっとうしようと、天に向かって叫んだが、万古にわたくしのような母親がどこにいたであろう。世孫は実家に戻って、顔を合わせると、幼い年齢にもかかわらず、恐ろしく、悲しい目に遭遇されて、そのお心の中はどのようであったかと、あらためておどろき、ご病氣におなりにならないものかと心配でならず、

「まことに悲しいことではございますが、これもみな天命でございましょう。世孫が身体を平安に保って、成長なされば、国家は太平であって、聖恩に報いることにもおなりです。この深い悲しみの中でも、世孫は決してお心をお痛めにならないように」

と申し上げた。そんなことがあっても、お父さまは宮廷から遠ざけられることはなく、お兄さまも官職がもとのままで往来なさった。世孫のお世話をしているのは、仲父³⁴⁾と叔父³⁵⁾ふたりの外三寸で、昼夜となくお守りして、またわたくしの季の弟³⁶⁾は子どもの時分からやって来ては、世孫といっしょに遊んだ。その子どもとわが家の小さな居間にいらっしゃって、お眠りになって、八、九日が過ぎたころ、金判書時默³⁷⁾とその子弟の金基大らがやって来て、拝謁しようとしたが、わが家

は狭い上に、世孫宮の上下の内人たちが全部いっしょに出て来ていたために、南の垣根の外の校理の李敬玉の屋敷を借りることにして、金判書の妻がその嫁を連れて来て、嬪宮にお仕えするようにさせたので、塀を越えての往来をするようになった。

そのとき、お父さまは罷職して、東郊に長らくいらっしゃったが、大朝は大処分をなさって、すっかり事がすんでしまっただけで、ふたたびお父さまを登用なさって、領相に命じるためにお呼び付けになった。お父さまは思いの外のことと小朝の処分の消息をお聞きになって、悲しみ、おどろいて、駆けつけるようにして、やって来られたが、宮下に至って、ほとんど気絶なさらんばかりであった。ちょうど世孫は王子齋室にいらっしゃるときで、気絶なさったことをお聞きになって、世孫ご自身がお用になる清心丸をくださったが、ほとんど息も絶えんばかり、ご自身でもまたどうしておめおめと生きながらえようというお気持ちであったろう。ただ、わたくしの気持ちと同じように、たとえ悲しみの中であっても、世孫をたいせつに保護しようというまごころだけはおもちで、お側を片時も離れずに、世孫を擁護して、宗社を保全なさろうという血心と丹忠は、天地神明がよくご存じのことであったろう。むごたらしく、まがまがしい事態の中で、なんとか生きながらえたものの、どう耐え忍んで来られたことであつたらう。呉ユソソと朴性源が屋敷の大門の外に来て、世孫を謹慎させるようにといったが、謹慎は当然のことであつたとしても、幼い子どものこととて、どうすればいいというのだらう。世孫は昼には屋敷にいらっしゃって、お過ごしであった。

東郊から戻られた後、すぐにお父さまにお会いすることができず、心配であったが、その翌日、お父さまがお許しを受けてやって来られ、母と子はお父さまにしがみついて、みなで慟哭したことであった。大朝のご命令をお伝えになったが、それは、わたくしが世孫をお世話し、保護せよ、というものであった。このとき、このご命令は、悲しみの中にあつても、世孫のためにはどんなに嬉しくて、涙を流したことであったか。わたくしは世孫の頭を撫でながら、大朝のご恩に感謝して、

「わたくしはあなたの父親の妻として、この事態を迎え、あなたは息子として、この状況に遭遇したが、ただ生命をいとおしむのがよく、だれを恨み、咎めるというものではありません。われわれ母子が今生きていられるのも、王さまのご恩なのです。仰ぎ見て、お頼りして、命をつなぐのも、一に王さまにかかっています。あなたに望むことは王さまのお気持ちを理解して、精一杯、気を取り直し

て、立派な人間になってくださることです。そうして、王さまのご恩に報いれば、あなたのお父さまにとっても孝子とおなりです。それ以外に、大切なことはありません」

と教訓した。そして、お父さまに対して、大朝のご恩を感謝しながら、

「残った日々はくださった日々で、ご命令のとおりに従うつもりであることを王さまに上奏なさってください」

と申し上げたが、わたくしのこのことばには少しの飾りごともなかった。最初からあのように愛情うすく遠ざけてお育てになったことが悲しく、しだいしだいにこのような状況に立ち至ったのだから、どうすることができようか。わたくしはすこしも心に含むところがなく、あえてお恨みすることはなかった。お父さまがやって来られて、世孫を抱いて慟哭なさり、慰めながら、

「こうなされたことは正しくて、世孫が賢くなられ、また、聖王になられれば、それが王さまのご恩に報いることで、お生みになったお父さまに対しても孝子とされることです」

とおっしゃって、帰って行かれた。

日が経つままに、とても悲しい状況を考えるばかりで、どうしていいかわからず、心は昏倒したままに過ごした。十五日のあいだ、小朝をお入れした米櫃はきつくきつく閉めて、奥深いところに置いて、やがて上の宮廷に参らせたというが、そのほかのことは知ることはできなかった。宮廷の中の緋緞の匹は出されることがなく、襲殮の諸道具もお父さまがみな差配なさったが、この世への恨みをお残しにならないように気をお配りになった。お父さまは、それまでの何年もの間、衣帯症に対して衣服を無数にくださったが、この度の葬事の衣もみな仕度してくださって、小朝のためには最後までまごころをお尽くしになった。

二十日の申の刻に、激しい雨が降り、雷声も轟いたが、小朝が雷をひどく怖がっていらっしやっただけを思い出して、どうなさっていることかと気が気ではなかった。わたくしは心の中で、穀を絶って、飢え死にでもしよう、水の深みにでも飛び込もうと、手拭いを撫でて、刀もしばしば手に執ったが、心弱く、強い決断をすることができなかった。しかし、食事がろくに喉を通らず、水も重湯もいただくことができないのに、わたくしの生命がもちこたえたことは不思議だった。その二十日の晩に、雨が降り出したときが、小朝のいまわのときであったが、どうしてこの状況に耐えることができたのだろう。その場で、身を震わせて悲しみ、生き残ること

が、むごたらしく、まがまがしいことに思われたことであつた。

宣禮宮は、仕方なく、あのように申されて、宗社のために大処分をなさるようにと進言なさつたが、小朝のなさつたことはなにかもがご病気のなせるわざであつたことを深く悲しんで、恩恵をお与えになつて、喪事も例の通りに行われるようにお望みであつた。大朝はそのような処分をなさつても、お怒りは衰えることなく、したがつて、小朝がお近づけになつた妓女、内官の朴必寿、あるいは別監や、匠人や、巫女に至るまで、みな死刑になさつたが、これは当然のことであつたから、あえて取り上げるまでもないことであろう。ただ、無性に悔まれることは、衣帯病によつておびたしい衣服を、取り替え、取り替え、召していらつしやつたのに、最後は白木綿の衣服一着で過ごされ、その日も白木綿の衣服でいらつしやつたことであつた。

大朝はいつぞ覧になつても、小朝が道袍か龍袍をお召しになっているのに、その日は初めて木綿の衣服をお召しになっているのをご覧になつて、そのご病氣はご存じなく、

「おまえはわたしを亡き者と考へて、白木綿の喪服を着て現われたのだな」とおしやつたので、いよいよ残された道のないことにお悟りになつた。

「今まで使用した道具をすべてもつて来い」

とおしやつたことがあつたが、その中には軍旗など一切合財があつた。国喪であつても、喪杖³⁸⁾は一本のほかは使わないはずなのに、小朝は異常なご病氣によつて、親の喪にしか必要もない喪杖を何本もお作りになつたことがあつた。生涯愛して、左右に離さずに置いておかれたのが環刀と宝剣であつたが、わざわざ喪杖の形をこしらえてそれを刀の鞘にして、柄を作り、その喪杖をついて歩き回られることがあつた。わたくしもそれを拝見して無残な思いがしたが、その忌まわしい何本もの喪杖を見逃がすこともできず、お怒りになっている大朝は、いよいよいきどおり、お怒りが爆発したのだから、どうして喪を立派になさろうというお氣持ちがあつたらう。小朝のご病氣はご存じなく、まったくの不孝者としてお亡くなりになつたことが、悔まれる。

初めは、臣下の喪として例に従つて行ふよふにということであつたが、そうするわけにもいかない。この事態に至つて、世孫を救い出すことが天恩であるとして、ご病氣によつて処刑なさつたものの、十四年の間、摂政の君としていらつしやつたのだから、喪も上下のけじめを見せて行われれば、上徳というところであつたが、

そうすることもできない。わたくしどもはただ悲しむだけのことで、二十日には、なす術もない状態であったが、復位なさることにして、喪事の始めから終わりまで必要な道具を整えになることになった。大朝の思い至らぬところはなくて、復位のことを慎重にお考えになって、すべてを前例どおりになさることを躊躇なさっていたが、やむをえずに、二十一日の晩には小朝を復位なさった。そこで、大臣たちが入侍して、初喪の次第を定めて、初めは、殯所は龍洞宮で行うことになった。

お父さまはこの状況にあって、すこしも判断をお誤りになることはなかった。王さまのお心にたがうことがあれば、そのときにはお怒りが火のようであったが、わが家の存亡は二の次にして、世孫を保全できないことにならないよう、わずかでも王さまのお心が変わらないようにお努めになって、屋敷にお戻りになったのを忘れることはできない。世孫には、決して遺恨をおもちにならないようにと、忠義を尽くし、誠を尽くされた。左右に周旋して、小朝の復位の後、贈り名を賜わるようになさり、殯宮は侍講院として、三都監³⁹⁾は規則どおりにするようにお定めになった。こうして、必要なことはみな決めて、ご自分が都提調となって、みずからお世話して墓所を決めるなど、細々としたことまで、少しも礼に欠けることのないようになさった。お父さまがお世話をなさらなければ、どの臣下があえて口出しをし、王さまもどうしてお顧みになることがあったろう。その日、お父さまは侍講院でお世話なさった後、暁になって屋敷に戻って来られ、わたくしたち母子をご覧になって、わたくしの手を取り、中庭で声を失うほどに慟哭なさって、

「これからのあなたは世孫に仕えて、長生きをするのだ。そうして、老境に至ってから、洋々たる福祿を授かるがよい」

とおっしゃった。そのときのわたくしの悲しみは万古にどうしてくらべるものがありえたらう。

わたくしは宮廷に参るや、時敏堂において発喪し⁴⁰⁾、世孫は建福閣において挙哀⁴¹⁾なさった。殯宮はわたくしのかたわらに清衍といっしょにいたが、天地の間にこのように悲しいことがいったいどこにあるだろうか。喪事の始まりから終わりまでに必要な衣服を整え、すぐに襲⁴²⁾を行ったが、暑い時期であったにもかかわらず、ご遺体はすこしもそこなわれず、その悲しみは今まで考えも及ばなかったもので、襲の後に殮⁴³⁾を行うために、前に出て行くわたくしの立場は千古にまれで、他の人の経験することのないものであった。その悲しい状況の中で、小朝とお交わした話しなどを思い出していたが、天を呼び地を極めるような広大な愛を被って

いながら、こうして自分だけが生きながらえていることが恥かしく、幽明の境を隔ててしまい、その天を衝くような壮気を拝見することもできなくなって、意味もなく生き残った者の憾みはいかばかりであったろう。

喪事の始めから終りまで、その悲しさはくらべるものとなかったが、今回は人々は臣下としての服喪のきまりをとらず、大殿官と内官のたぐいはみな色の浅い服を着た。梓宮の祭奠は外で行うこととして、中で準備することを恐れて、時機をうかがっていたが、大朝には特に祭祀をご覧になろうというおことばはなかったから、朝夕の上食⁴⁴⁾と、朔望の奠⁴⁵⁾だけをみな例のとおりに行った。世孫、世孫嬪の両宮と郡主とを、小朝のご遺体を梓室⁴⁶⁾にお入れする前には、とても拝見するに忍びなかったが、成服⁴⁷⁾の日にはお出になって哭を挙げることとなっていた。世孫が哀痛して、お挙げになる哭声はとても聞いていられたものではなく、だれであれ、感動しない者はなかった。七月が因山⁴⁸⁾ということになって、その前に宣禧宮がわたくしのところにやって来られ、梓室に向かって、頭をたたき、胸を打って、慟哭なさったが、その情理は相変わることなく、決してお薄れになることはなかった。

因山に際し、大朝は墓所にみずからおもむかれ、題字までみずからお書きになったが、父と子のあいだで幽明界を隔てることになって、今はたがいにとどのようなお気持ちでいらっしゃったか、考えも及ばない。七月に春坊⁴⁹⁾を附設なさって、これで完全に世孫がお世継ぎとなることが決まった。大朝のおかげであることはもちろんであるが、お父さまのご忠義と懸命に保全申し上げた功績がなければ、いったいどうなったことかわからない。

八月に、大朝は璿源殿において茶礼を行われた。わたくしは恐縮したものの、行かないわけにもいかず、真殿に近い拾翠軒という建物にまで参って、大朝を拝したが、わたくしの悲しい心の内は万分の一もあえて披露することはせず、

「母と子がこうして健やかでいられるのは、みな王さまのおかげです」と申し上げた。大朝はわたくしの手をとらえて、

「あなたがこのように気の毒なことになってしまい、とてもあなたを見るに忍びないが、こうしてわたしの塞いだ心を晴らしてくれるのは、まことにうれしいことだ」

とおっしゃったが、このおことばをうかがって、わたくしの心はいっそう塞いだ。

「世孫を慶熙宮にお連れして、教育なさるように、お願いします」と申し上げると、

「あなたは世孫と離れても、それに耐えることができるのか」
とおっしゃったので、わたくしは涙を流しながら、

「離れ離れになって、寂しいということなどは小事であって、上にお仕えしてお
学びになることは大事です」

と申し上げた。そうして、世孫を上にお上げすることに決まったが、母と子の普通の
情理として、たがいに離れて生きることをどうして耐えることができようか。世
孫はわたくしから離れて行くのがつらく、泣きながら出て行かれたが、わたくし自
身も心が切り刻まれるようであるのを、じっと耐えて過ごした。大朝のご恩は重
く、世孫を愛されることは至極であって、宣禮宮はご子息への情愛を世孫にお移し
になって、座臥起居と飲食のすべてにお心を尽くされ、誠心でもってお世話なさつ
たが、宣禮宮の心情として、どうしてそうしないでいられたらう。

世孫は四、五歳のころから、文章を好まれ、居所を別にして過ごしていても、学
間に励んでいっしやらないのではないかという心配はせずともよかった。わたく
しを思い出されることが日に日にはなはだしく、世孫が母親を慕われる情はまこと
にこまやかで、暁に目覚めて、わたくしに手紙を書かれ、書箴の前にわたくしの返
事を読んで、お心を落ち着けられるというふうであった。三年の離れて過ごしたあ
いだ、いつも変わらずにそれをお続けになったが、不思議なほどに大人びていっ
しゃって、わたくしは持病がしばしば出て、三年のあいだというもの、その病が去
ることがなかったが、遠く離れていても、医官と相談して、薬を調べてお送りくだ
さったのは、まことに立派な大人のすることのようであった。これはみな天性の孝
心のなせるところであつたらうが、十歳あまりの若年にもかかわらず、どうしてそ
のようであつたのだろうか。

その年、千秋節⁵⁰)を迎えて、わたくしはじっとしずかにしていたが、ご命令に
よって、やむをえず、参つたところ、大朝はわたくしをご覧になって、憐れにお思
いになることが以前に増して、わたくしがいた建物は景春殿の南側の小さな建物で
あつたが、その名前を嘉孝堂とお付けになって、みずから筆を執ってお書きになつ
た懸板をくださった。

「あなたの孝心に今日は報いようと、これを書いて見たのです」
とおっしゃったので、わたくしは涙を流しながら、それを受け取って、なにもお答
えすることばが出て来ないのを心配していたところ、お父さまがやって来られて、
感謝して、

「今日、この嘉孝の二字を懸板として懸けるようにとおっしゃったのは、子孫の宝となるものです。お上のご慈愛と下にあつてこれをお受けになつた孝誠の心はまことに喜ばしいかぎりです」

とおっしゃった。かかる大朝のご恩を拝受した道理として、これからは封書にその堂号を書いてやり取りするようにおっしゃつて、感謝の思いを骨に刻んだことであつた。先王⁵¹⁾は慈慶殿を造つて、わたくしが住まうようになさつたが、そのとき、処遇がわたくしにはあまりに高くもつたいなく、まばゆいばかりに光り輝く建物にいたいという気持ちではなかつたものの、その孝行のお気持ちに感動して、つとめておことばに従うことにした。その建物で余生を終えることとなつたので、嘉孝堂の懸板を移し、慈慶殿上房南便の門の上に懸けて、英廟の慈恩を忘れないようにしたのであつた。

その年の十二月に詔勅があつて、大朝は世孫をお連れになつて、魂宮⁵²⁾にお参りになつた。お帰りになるとき、世孫を元通り連れて帰ろうとなさつたが、世孫は母親と離れることをとても悲しがつて、お泣きになつた。そのご様子をご覧になつて、

「世孫はあなたから離れることがとてもできずに、むづかっている。置いて行くことにしよう」

とおっしゃつた。大朝ご自身も世孫を慈しんでいらつしやるのに、世孫の方はそのお慈しみのお心を考えることなく、母親のことだけを考へていらつしやる。そのことを辛くお思ひのようであつたから、わたくしが、

「世孫がお下がりになれば、王さまが恋しがられ、お上がりになると、母が恋しがりますが、王さまがお帰りになれば、王さまを恋しがりなさいましょう。むづかつていらつしやつても、どうかお連れになつてください」

と申し上げると、顔色をなごませて、

「そうすることにしよう」

とおっしゃつて、連れて、お帰りになつた。世孫は大朝に随行されて、母親が人情が薄いために、離れて行かせるのだとお思ひで、泣いて行かれたが、わたくしの心もいかほどであつたろうか。大朝にお従いになつて、その父親の果されなかつた子の道を受け継ぐことが正しく、また政治や国家のことを正しく学んで知ることがいいことで、決して離れたくはないという母親の情を切り捨てて、わたくしは見送つた。これはみな以前のことをきびしく心に懲戒して、世孫をして一心に大朝に孝誠

を尽くさせ、かわいがってくださるお心にすこしでも背くことがないよう気を配ったからのことで、今となつては、どうして世孫のための私情だけで立ち働くことができたろう。

宗社の安危が世孫の一身にかかっている、わたくしの切ない心は天の見そなわすところであろうが、これはひとりわたくしの心に出たことではなく、みなお父さまがわたくしを導いて、婦女の些細な私情を顧みることなく、大義につくよう訓戒なさったことによる。お父さまの苦心と血忠はすべて世孫のため、国家のために注がれたが、だれがそれをみな仔細に理解しえたらう。

世孫は魂宮を離れて出て行かれたが、悲しんでお泣きになる声は、聞く者のだれが感動しないでいられたらう。魂宮のお位牌には意志などないはずなのに、その子が来て、哀哭なされば、位牌もお喜びになるようで、もの寂しい魂宮にも光りが差して、悲しみの中にも、かえって慰められるようであったが、それにしても、もしわたくしが世孫を産んでいなければ、宗社はいったいどうなっていたことだろう。危機に瀕した国家がみずから保全しようとしたのか、庚午の年（1750）生れの子が死んだ後に、壬申の年（1752）の慶事があったのであった。

壬午の年（1762）の禍変は万古にないことであって、小朝ご自身には千万の不幸が重なって、そうした事態に立ち至ったが、子息を残してご自身の跡を継がせることができ、喪の後には、大朝は慈しみ、世孫は孝を尽くすことに余念がなかったから、ふたたびなにかがあらうとは、夢にも考えたであらうか。ところが、甲申の年（1764）二月の処分⁵³は千万の夢にも思わなかったことで、上のなさったことといっても、下の者があえてそのように仕向け申したもので、わたくしのそのときの悲しみはくらべるもののないほどであった。わたくしは、禍変のときにあっても、苦難の多いこの人生を終らせることなく、生きながらえたのであったが、そうして今度のことに遭ったのは千万の禍根であったといつてよい。そのまま死んでしまいたかったが、生命を意に任せることができず、その処分を憾みながら、あえて耐えたものの、悲しみは壬午の年に劣らず、宣禮宮もお食事を廃して、おどろき悲しまれたが、それをどうしてみな記録することができようか。

世孫は幼年ながらも、古今にない悲しみを抱き、また帝王の家に例のないような事柄に当面して、はなはだお哀しみになって、いよいよ喪服をお脱ぎになるときは、哭泣の声が天を貫き、地を極めるようで、初喪の際に天地がかきくれたときの悲しみをさらに上回るようであった。年齢も二歳お増えになっていたので、ご自身

のお心にも遭われたことが理解できて、ますますお憶みになったようであった。わたくし自身の肝腸も燃えて、溶けてしまうようであって、すぐにでも死んでしまいたかったが、世孫のお悲しみになるさまは、とても見るに耐えないものであった。わたくしがいなければ、世孫のお身体がいつそう危ういことになるようで、事ここに至っては、ますます世孫をお守りすることが大切になった。

わたくしは心をつよく奮い立たせて、世孫をお慰めして、千金のお身体を保護することとし、たとえ世孫の遺恨が万端であったとしても、おのずとおとなしくなさり、父親の無念に報いようとなさっても、あれこれと説諭して、お気持ちを鎮静なされるようにしたが、世孫は終日食事を廃し、哭泣して、はなはだお悲しみであった。なんとかお慰めしようと、横に抱いてお寝かせて、あやして、おやすみになるようにしたが、なかなかおやすみにはならず、そのご様子は古今にないものであった。その日というのは二月十一日のことであったが、どうしてそうした処分になったのか、奇怪千万なことであった。大朝が不意におわたりになり、璿源殿にひさしくおとどまりになって、わたくしのところにやって来られたが、わたくしには、なんであれ、あえて申し上げることがあつたらうか。

「母と子が今も生きていることは王さまのご恩によるもので、処分がこのようなことになったところで、なにを申し上げることがございましょう」と申し上げると、

「あなたがそうおっしゃるのはまことに立派な心がけだ」

とおっしゃった。情理として理解しようとしても、悲しみと恨みとはすっかり消え去ったわけではなかった。わたくしの命運にはますます奇怪なことが襲いかかろうとしていたが、いったいどうすることができたというのか、万古にもない運命であった。

七月の禪祀⁵⁴⁾は、宣禧宮もやって来られて、執り行われ、秋も終れば、姑と嫁とで会って、相談することにしようとして、ねんごろに約束していたのに、突然、背腫がおできになって、七月二十六日に宣禧宮はお亡くなりになった。わたくしの悲しみはどうして普通の嫁と姑の情であつたらう。国家のためだといって、母親としてとてもできないようなことをなさったが、たとえそれで世孫が救われたとしても、その悲しみはいかばかりであつたらう。

「わたくしは人としてとてもできないことを、あえてしてしまった。わたくしの跡には草も生えないでしょう」

とおっしゃり、また、

「わたくしの本心というのは国のため、王さまのためということでしたが、考えれば考えるほど、なんともむごく、まがまがしいことをしてしまいました。あなたにはわたくしの気持ちがわかっていただけようし、世孫とその姉妹たちにもいずれわかっていただけよう」

とおっしゃっていた。いつも夜はおやすみになれないようで、建物の東の離れの後に出てお座りになっては、東方を仰ぎ見て、お心をくりかえしお痛めになって、あるいはそうした処分がなくても、国家は安泰だったのではないかと、ご自身は誤ったのではないかと考え、またそうではなかったと思ひ直されるのであった。女の愚かしい所見で自身がどうして誤らないでいられたろうともお思いであった。魂宮に参られたときには、泣き叫んで悲しまれ、心中に病をかかえ、お身体をこわすほどにいよいよお悲しみであった。

大体、あの年のことを、今の人々のだれがわたくしと同じほどに知っていよう。また、その悲しみが、わたくしと先王ほどの者がいったいどこにいて、景慕宮にわたくしと同じほどにわずかのすきもなく誠を尽くした者がどこにしようか。そのことで、わたくしはつねに先王に、

「あなたはたとえご子息であっても、そのときはとても幼くていらっしやいました。ご自身が仔細にご存じないことで、あの年に属することは、どんなことであれ、わたくしにお尋ねになることにして、他の人の騒がしい話しはそのままお信じにならないでください。人々が一時の寵愛を手に入れようとして、ちょっと違った噂を王さまのお耳に入れるかもしれませんが、すべて怪しい話しだとお思ってください」

と申し上げていたが、先王は、

「だれが知らないのですか。あの者たちが父母のために誠がなく、無限に侮辱を行ったことを。その侮辱に目をつぶって、そのまま景慕宮を過度に敬う態度をとれば、かえって、人の子としての道理に背くものです。議論も尽かさずに、王位を追贈したり、なにか贈り名したりすることも、今はわたくしたちのなすがままですが、そうしたことをすれば、はっきりと知っていながら、情にほだされた、愚かな人間であることを免れることができません」

とおっしゃった。わたくしは先王のお悲しみと思慮深さにとても思い及ばなかった。

大体、あの年のことについては、世間では二つの議論があって、正と否に分かれていたが、一つは、大処分は公明正大であって、天地の間にいささかもまちがいがなかったとして、英廟の盛徳と大功とを讃えるばかりで、哀痛極まりのないものであったという心の欠けているものであった。これは景慕宮を不孝の罪科で亡き者になさったわけであって、英廟の処分は敵国を掃蕩したり、逆変を平定したりなされたことと同じであるというものであったが、これでは景慕宮にどのような浮かぶ瀬があり、またそのお子の先王にとってもどのようなお立場であることになったろうか。これは景慕宮と先王に対してあまりにお気の毒な言である。もう一つの議論というのは、景慕宮はもともとご病気ではなかったのだが、英廟は讒言をお聞きになって、そうした過ぎた処分をなされたのだから、復讐し、恥を雪ぐべきであるとして、景慕宮のために恨みを晴らし、恥を雪ごうという意図のものであった。しかし、それでは英廟が無罪である景慕宮に対して、だれの讒言を聞かれたにせよ、そうした処分をなさり、景慕宮がお亡くなりになってしまったということになって、そうだとすれば、英廟にとってはどれほどかの失徳ということになるものであった。二つのいずれにしても、三代の王さまにとってお気の毒なことになり、真相とは異なるものであった。

ともあれ、お父さまが何度もおっしゃったように、ご病気が重く、お身体も衰弱なされて、国家の危機も呼吸の間に迫ったために、英廟は哀痛極まりないお気持ちであったけれど、万々やむをえずに、あの処分をなされたので、景慕宮も正気にお戻りのときは、徳を汚していないかと、ご心配なさっていたのに、ご病気がそうした天性を失わせて、ご自身でもなされたことをすべてお忘れであったのだ。

ご病気におなりだったことはただただお気の毒であったが、ご病気はいくら聖人であったところで、免れないものであって、景慕宮がどうして徳をお汚しだったということがあろう。実情はこうであり、そのときの事情もこうであって、ありのままに言えば、英廟のご処分も哀痛極まりない状況の中で、万々やむをえない中でなされたことであった。景慕宮にしても、不幸にも、お気の毒なご病気によって、万々やむをえない立場に立ってしまわれたのであった。それが実情にもたがわず、義理にも合致しているのであって、先の二つの議論のようであれば、一つは英廟の失徳となり、一つは景慕宮の背徳となり、先王にとってもお気の毒で、この二つの議論はお三方に対して不敬の罪を犯すものとなる。一方で、このご処分はご立派であったとして、お父さまにだけ罪を被せようとして、お父さまが米櫃にお入れした

というのだが、お父さまがそうならなかったという曲折は他の記録にも載せていることであって、ここでまたくり返し述べるようなことはすまい。このようなことをいう輩というのは、英廟に忠節であるのか、景慕宮に忠誠であるのか、どちらともいえまい。先王があこの年のことを無にしないようにとお思いなら、無論、東西南北の言を仮借なさるがよく、あこの年のあこの日のことにたとえ是非があるとしても、有罪と無罪が、先王の口によって、そうではなかったとくつがえすことはできないことだと知って、あこの年のことを奇貨となさるのがよいであろう。わたくしどもの意を迎えるように、ことばを弄して、事を起こし、人を害した上で、そうして忠臣であるかのように振る舞う者がいるやもしれないが、万古にそのようなことが許されていいものであろうか。

四十年来、あこの年のことでは忠逆が混乱して、是非が倒置して、今に定めることができないうが、景慕宮のご病氣は万々やむをえないものであり、英廟のご処分もまたやむをえないものであったのである。あの米櫃については、英廟がみずからお考えになったものであったが、わたくしだろうと、英廟であろうと、至痛はおのずと至痛であり、義理はおのずと義理であると知るべきであろう。悲しみの中においても国家を保全して、長く支えられた英廟のご恩には感謝すべきであり、当時すべての臣下たちがやむをえずに話したことを、後人が想像するときには、不幸にもああだこうだと思ひ込むことがあっても、その処分や君臣の上下のことについて、あれこれと口をさしはさむのを、どうして黙っていることができようか。あこの年に起こった事どもを、わたくしはとでも記録して置こうという意志などなかったのだが、また思い返すに、主上⁵⁵⁾が子孫としてそのあこのことを茫然としてご存じないことがお気の毒であり、また是非についてもわきまえていらっしやらないのではないかと憐れんで、仕方なく、このように記録した。しかし、この中でとても自慢できないのは抜け落ちた事柄が多いことで、わたくしの頭がすっかり白くなった晩年に、これをよく書いたとはいふものの、人の頑迷なることがどうしてここに立ち至ったのだろうか。天に叫んで、慟哭して、命数を恨むまでのことである。

〔訳注〕

- 1) 英祖二女和順翁主の花婿の月城尉金漢燾。
- 2) 忠臣、孝子、烈女を表彰して立てる赤い門。
- 3) 英祖三十三年十一月（1757年11月）、世子景慕宮が何日も進謁をしなかったために、英祖は怒り、位から下ろす命令をしたところ、世子が昏倒して、負傷したこ

と。

- 4) 人が死んで一年経って行ふ祭祀。暮年祭。
- 5) 国家を挙げての喪。
- 6) 服喪の人が廬幕にいること。
- 7) 仁元王后の殿号。
- 8) 貞聖王后の殿号。
- 9) 王, 王后, および王大妃の三年の喪を終えた後にその位牌を太廟に祭ること。
- 10) 王妃のいらっしゃる御殿。あるいは王妃その人。ここでは貞純王后。
- 11) 毎月六度, 議政, 台諫, 玉堂などが入侍して, 重大かつ緊要な政務について上奏すること。
- 12) 英祖九女, 和緩翁主。宣禧宮の所生の女子。日城尉鄭致達に下嫁。
- 13) 著者の惠慶宮洪氏にとっては末の弟の洪樂倫。
- 14) 同じく著者にとっては長兄の子。
- 15) 平安監司。
- 16) 本貫は延日, 字は士瑞, 号は南崖。英祖十三年丁巳, 文科に及第, 職は左議政に至る。
- 17) 昌慶宮慈慶殿の西にあった建物。
- 18) 英祖四十年甲申, 世孫を孝章世子の養子としたこと。
- 19) 清風金氏金道泳の家。
- 20) 清風金氏金道泳の息子が聖応で, その母親, すなわち金道泳の夫人の遷居。
- 21) 正祖大王の大妃。
- 22) 金聖応の息子。正祖の国舅の清原府院君。
- 23) 頭髪の乱れを防ぐために頭にまとう馬の尾の毛で作った巾。
- 24) 一品以上の官員が用いた, どんな模様も刻まない玉で作られた貫子, すなわち網巾の紐を通すための輪。
- 25) 正三品の官員が用いた模様の刻んである貫子。
- 26) 婚姻に際し, 新郎が新婦の家に鴨をもって行き, 盆の上に置いて, 敬礼する礼。
- 27) 咸鏡道にある陵の調査を行う役目。
- 28) 英祖三十七年辛巳の一月から三月にかけて微行したこと。
- 29) 同じく英祖三十七年三月晦日ごろ, 平安道に微行したこと。
- 30) 刑曹判書尹汲に仕えた羅景彦が英祖三十八年壬午五月十一日に起こした変。
- 31) 英祖七女, 和協翁主の花婿, 永城尉申光綏。
- 32) 慶熙宮にあった建物。
- 33) 居間と板の間をあいだにして向かい合っている部屋。
- 34) すぐ下の弟の洪樂信。

- 35) 楽信の下の弟の楽任。
- 36) 一番下の弟の楽倫。
- 37) 正祖の国舅の清原府院君金時默。
- 38) 喪に服する人がつく杖。父親の喪には竹、母親の喪には桐で作る。
- 39) 殯殿都監，国葬都監，山陵都監。都監は国家の大事に当たって臨時に設置する官庁。
- 40) 喪を発すること。
- 41) 死者の靈魂を呼び戻した後に，葬制（喪に服する主体をいう）が髪を解き，哀しみ泣いて，喪に服することを発表すること。
- 42) 死体に屍衣を着せること。
- 43) 死者の身体を洗い，耳目口鼻を覆うこと。殮襲。
- 44) 喪家で朝夕に祭壇の前に差し上げる飲食。
- 45) 喪中の家で毎月の一と十五日に行う祭り。
- 46) 棺のこと。
- 47) 喪が生じて，初めて喪服を着る日。
- 48) 山陵に埋葬すること。
- 49) 世子侍講院。
- 50) 王世子の誕生日。
- 51) ここではわが子の正祖のことをいう。
- 52) 王世子の葬礼後，三年のあいだ神位（位牌）を祭った宮殿。
- 53) 英祖四十年甲申二月二十日，王世孫，後の正祖を孝章世子（英祖一男。英祖四年戊申に十歳で夭折）の嗣子としたこと。
- 54) 大喪を行った次の月に行う祭祀。
- 55) 著者の孫に当たる純祖のこと。